シラバス

令和７年度

授　業　概　要

科目名	授業方法	授業担当者	実務経験
人間の尊厳と自立	講　義・演　習	溝渕　智則	有

授業の回数	時間数(単位数)	配当学年・時期	必修・選択
１５回	３０時間（1）	１学年　前期	必　修

[授業の目的]

「人間」の理解を基礎として、人間としての尊厳の保持と自立・自律した生活を支える必要性について理解し、介護現場における倫理的課題について対応できるための基礎となる能力を養う学習とする

[授業の概要]

人間の尊厳と自立では、介護福祉を実践するために必要な人間に対する基本的理解を養う。ひとつは福祉理念の歴史的変遷を学ぶことを通し、人間の尊厳・人権尊重及び権利擁護の考え方を養う。また、本人主体の観点から自立の考え方、自立生活の理解を通し、その生活を支える必要性を理解する

[到達目標]

（1）人権思想・福祉思想の歴史的変遷を理解し、人間の尊厳・人権尊重及び権利擁護の考え方を養う

（2）人間にとっての自立の意味と、本人主体の観点から、尊厳の保持や自己決定の考え方を理解できるようにする

[授業計画]

回	授業内容	方　法	備　考
1	人間とは・尊厳とは・自立とは	講　義	
2	人間の尊厳と利用者主体	講　義	
3	人権思想の潮流とその具現化	講　義	
4	人権や尊厳に関する日本の諸規定	講　義	
5	社会福祉領域での人権・福祉理念の変遷①	講　義	
6	社会福祉領域での人権・福祉理念の変遷②	講　義	
7	人権尊重と権利擁護	講　義	
8	人権思想から人間の尊厳について学ぶ	演　習	
9	介護保険法における尊厳と自立を考える	演　習	
10	自立の概念の多様性	講　義	
11	介護を必要とする人の自立と自立支援	講　義	
12	介護を必要とする人の尊厳の保持と自立、自立支援の関係性	講　義	
13	利用者の主体性を大切にした声かけを考える	演　習	
14	利用者の自立支援を考える	演　習	
15	筆記試験		

[使用テキスト・参考文献]

中央法規　介護福祉士講座　1
人間の理解

[評価方法]

筆記試験　８０％
授業態度　１０％
出席状況　１０％

授　業　概　要

科目名	授業方法	授業担当者	実務経験
人間関係とコミュニケーションⅠ	講義　・　演習	斎藤　一夫	有

授業の回数	時間数(単位数)	配当学年・時期	必修・選択
15回	30時間（1）	1学年・前期	必　修

[授業の目的]

対人関係に必要な人間の関係性を理解し、関係形成に必要なコミュニケーションの基礎的な知識を習得する学習とする

[授業の概要]

人間関係とコミュニケーションの基礎では、自己理解、他者理解をもとに対人関係とコミュニケーションの技法の基礎を学び、組織におけるコミュニケーションについて理解する。現代社会の基礎的問題を理解し、社会を見つめる感性や現代を生きる人間としての生き方について考える力を養う学習とする。

[到達目標]

人間関係を形成するために必要な心理学的支援をふまえたコミュニケーションの意義や機能を理解できるようにする

[授業計画]

回	授業内容	方　法	備　考
1	人間の誕生と介護の関係・自分と他者の理解	講　義	
2	発達心理学からみた人間関係	講　義	
3	社会心理学からみた人間関係	講　義	
4	人間関係とストレス	講　義	
5	自分と他者の認識のずれについて考える	演　習	
6	コミュニケーションの概念・基本構造・手段	講　義	
7	関係性による挨拶の違い、含まれるメッセージ 非言語の種類とメッセージについて考える	演　習	
8	対人援助の基本となる人間関係とコミュニケーション	講　義	
9	対人援助における基本的態度、バイステックの7つの原則	講　義	
10	傾聴について考える・バイステックの7原則について考える	演　習	
11	組織の条件とコミュニケーションの特徴・情報の流れ	講　義	
12	組織において求められるコミュニケーション	講　義	
13	組織のコミュニケーションについて考える	演　習	
14	ブレーンストーミングをやってみる	演　習	
15	筆記試験		

[使用テキスト・参考文献]

中央法規　介護福祉士講座　1
人間の理解

[評価方法]

筆記試験　８０％
授業態度　１０％
出席状況　１０％

授　業　概　要

科目名	授業方法	授業担当者	実務経験
人間関係とコミュニケーションⅡ	講義　・　演習	斎藤　一夫	有

授業の回数	時間数(単位数)	配当学年・時期	必修・選択
15回	30時間（1）	1学年・後期	必　修

[授業の目的・ねらい]

介護の質を高めるために必要な、チームマネジメントの基礎的な知識を理解しチームで働くための能力を養う学習とする

[授業全体の内容の概要]

チームマネジメントではヒューマンサービスとしての介護サービスの特徴をふまえ、チーム運営の基本や人材育成の管理法の基礎を学ぶ。

[授業修了時の達成課題（到達目標）]

介護実践をマネジメントするために必要な組織の運営管理、人材の育成や活用等の人材管理、それらに必要なリーダーシップ・フォロワーシップ等、チーム運営の基本を理解できるようにする

[授業計画]

回	授業内容	方　法	備　考
1	ヒューマンサービスとしての介護サービス	講　義	
2	介護現場で求められるチームマネジメント	講　義	
3	介護実践におけるチームマネジメントへの取組み	講　義	
4	介護サービスと他の仕事のちがいについて考える ケアを展開するさまざまなチームについて考える	演　習	
5	ケアを展開するために必要なチームとその取組み	講　義	
6	チームでケアを展開するためのマネジメント	講　義	
7	チームを最大化するためのマネジメント	講　義	
8	情報共有の場について考える リーダーシップ・フォロワーシップについて考える	演　習	
9	介護福祉職のキャリアと求められる実践力 キャリアデザイン	講　義	
10	介護福祉職のキャリア支援・開発	講　義	
11	自己研鑽に必要な姿勢	講　義	
12	介護福祉士としてのキャリアをイメージする スーパービジョンの機能について理解する	演　習	
13	介護サービスを支える組織の構造・機能・役割・管理	講　義	
14	組織の理念・委員会について考える	演　習	
15	筆記試験		

[使用テキスト・参考文献]

中央法規　介護福祉士講座　1

人間の理解

[評価方法]

筆記試験　８０％　授業態度　１０％

出席状況　１０％

授　業　概　要

科目名	授業方法	授業担当者	実務経験
社会の理解Ⅰ	講義　・　演習	溝渕　智則	有

授業の回数	時間数(単位数)	配当学年・時期	必修・選択
15回	30時間（1）	1学年・前期	必　修

[授業の目的]

個や集団、社会の単位で人間を理解する視点を養い、生活と社会の関係性を体系的に捉える学習とする。対象者の生活の場として地域という観点から、地域共生社会や地域包括ケアの基礎的な知識を習得する学習とする

[授業概要]

社会の理解では、生活の基本機能とライフサイクルの変化及び家族、社会、組織、地域社会の概念を理解する。その上で、地域社会における生活支援について学び、地域共生社会の実現に向けた制度や施策、社会保障制度、社会福祉と介護保険制度、障害者福祉と障害者保健福祉制度や他の介護実践に関連する諸制度にどのようなものがあるかを具体的に学ぶ

[到達目標]

（1）個人・家族・地域・社会のしくみと、地域における生活の構造について学び、生活と社会のかかわりや自助・互助・共助・公助の展開について理解できるようにする

（2）地域共生社会や地域包括ケアシステムの基本的な考え方としくみ、その実現のため制度・施策を理解できるようにする

（3）社会保障制度の基本的な考え方としくみ、社会保障の現状と課題を理解できるようにする

[授業計画]

回	授業内容	方　法	備　考
1	生活の基本機能	講　義	
2	ライフスタイルの変化	講　義	
3	家族の機能と役割・家族と生活の機能	講　義・演　習	
4	社会・組織の機能と役割	講　義	
5	地域・地域社会	講　義	
6	地域社会における生活支援・地域と生活支援	講　義・演　習	
7	地域福祉の発展・地域共生社会	講　義	
8	地域包括ケア	講　義	
9	自分の住んでいる市町村の行政計画・ボランティア	演　習	
10	社会保障の基本的な考え方	講　義	
11	日本の社会保障制度の発達	講　義	
12	日本の社会保障制度のしくみ	講　義	
13	現代社会と社会保障制度	講　義	
14	社会保障の意義と機能・少子高齢化と持続可能な社会保障のあり方	演　習	
15	筆記試験		

[使用テキスト・参考文献]

中央法規　介護福祉士講座　2
社会の理解

[評価方法]

筆記試験　８０％　授業態度　１０％
出席状況　１０％

授　業　概　要

科目名	授業方法	授業担当者	実務経験
社会の理解Ⅱ	講義　・　演習	溝渕　智則	有

授業の回数	時間数(単位数)	配当学年・時期	必修・選択
15回	30時間（1）	1学年・後期	必　　修

[授業の目的]

日本の社会保障の基本的な考え方、しくみについて理解する学習とする。高齢者福祉、障害者福祉及び権利擁護等の制度・施策について、介護実践に必要な観点から、基礎的な知識を習得する学習とする

[授業の概要]

社会の理解では、生活の基本機能とライフサイクルの変化及び家族、社会、組織、地域社会の概念を理解する。その上で、地域社会における生活支援について学び、地域共生社会の実現に向けた制度や施策、社会保障制度、社会福祉と介護保険制度、障害者福祉と障害者保健福祉制度や他の介護実践に関連する諸制度にどのようなものがあるかを具体的に学ぶ

[到達目標]

（1）高齢者福祉制度の基本的な考え方としくみ、介護保険制度の内容、高齢者福祉の現状と課題を理解できるようにする

（2）障害者福祉制度の基本的な考え方としくみ、障害総合支援法の内容、障害者福祉の現状と課題を理解できるようにする

（3）人間の尊厳と自立にかかわる権利擁護や個人情報保護等、介護実践に関連する制度・施策の基本的な考え方としくみを理解できるようにする

[授業計画]

回	授業内容	方　法	備　考
1	高齢者保健福祉の動向	講　義	
2	高齢者保健福祉に関連する法体系	講　義	
3	介護保険制度	講　義	
4	介護保険制度の動向・自分の住んでいる地域の高齢者ケアの課題と方策	演　習	
5	障害者保健福祉の動向	講　義	
6	障害者の定義・障害者保健福祉に関する制度	講　義	
7	障害者総合支援制度①	講　義	
8	障害者総合支援制度②	講　義	
9	介護保険制度と障害者総合支援制度の比較	演　習	
10	障害児・者を支援する施設・事業所における介護福祉士の職務（仕事）	演　習	
11	個人の権利を守る制度	講　義	
12	保健医療に関する制度・貧困と生活困窮に関する制度	講　義	
13	地域生活を支援する制度	講　義	
14	「介護サービス情報公開制度」と「福祉サービス第三者評価事業」 厚生労働省のホームページを通した制度の理解	演　習	
15	筆記試験		

[使用テキスト・参考文献]

中央法規　介護福祉士講座　2

社会の理解

[評価方法]

筆記試験　８０％　授業態度　１０％

出席状況　１０％

授　業　概　要

科目名	授業方法類	授業担当者	実務経験
日本語Ⅰ（基礎編）	講義 ・ 演習	岡田　寿美	有

授業の回数	時間数(単位数)	配当学年・時期	必修・選択
15回	30時間（1）	1学年・前期	選　　択

[授業の目的]

介護を実践するにあたり、最も関係性構築に必要なコミュニケーション技術。その基本となる日本語について基礎的な学習を行い相手の想いをくみ取るだけでなく、自分自身の想いもより正確に相手に届ける事ができるようにするために学習を行う

[授業概要]

現代社会の基礎的問題を理解し、社会を見つめる感性や現代を生きる人間としての生き方について考える力を養う学習とする。また、基本的問題を見つめる感性や現代を生きる人間としての生き方について考え、挨拶やお礼など基本的に人間関係を構築するなかで必要な技術を身につけるため

グループワークなどを活用し日本語の基礎力向上のための学習とする

[到達目標]

日本文化に触れつつ、話せる事、聞き取れる事、理解出来る事、を増やしていける時間とする

[授業計画]

回	授業内容	方　法	備　考
1	日本人学生の留学体験記　　読み・ワーク	講　義・演　習	
2	外国人留学生の思い　　読み・ワーク	講　義・演　習	
3	「日本一の旅館」加賀屋の女将に聞く　読み・ワーク	講　義・演　習	
4	Bentoで日本をもっと近く　　読み・ワーク	講　義・演　習	
5	結婚・子育て、夢描きにくく	講　義・演　習	
6	よろしく　日本語表と裏	講　義・演　習	
7	奇跡の職場　新幹線清掃チームの働く誇り　読み・ワーク	講　義・演　習	
8	絵本　あらしのよるに　他　　読み・ワーク	講　義・演　習	
9	絵本　大きなかぶ　　他　　読み・ワーク	講　義・演　習	
10	新聞から時事問題について	講　義・演　習	
11	新聞から時事問題について	講　義・演　習	
12	新聞から時事問題について	講　義・演　習	
13	日本の文化―　衣食住	講　義・演　習	
14	日本の文化―　漫画・アニメ	講　義・演　習	
15	筆記テスト		

[使用テキスト・参考文献]

中級日本語カルテットワークブック
絵本
講師持参資料

[評価方法]

筆記試験　８０％
授業態度　１０％
出席状況　１０％

授　業　概　要

科目名	授業方法	授業担当者	実務経験
日本語Ⅱ（応用編）	講義　・　演習	岡田　寿美	有

授業の回数	時間数(単位数)	配当学年・時期	必修・選択
15回	30時間（1）	2学年・前期	選　　択

[授業の目的]

日本語Ⅰで学んだ基礎をふまえ、応用していく力を身につける。特に利用者やそのご家族、施設スタッフとの会話をイメージし、コミュニケーション技術を向上させるための学習とする

[授業の概要]

現代社会の基礎的問題を理解し、社会を見つめる感性や現代を生きる人間としての生き方について考える力を養う学習とする。

医療施設の現場において必要なコミュニケーション力を培い、実践に役立つことができる授業とする

[到達目標]

例題を用いてシミュレーションを行ったり、グループワークで日本語についての知識を深めて行く。また、小学生で習う漢字を習得できるように学ぶ

[授業計画]

回	授業内容	方　法	備　考
1	例題①　　利用者と初対面のときの関わり方	講　義・演　習	課題：漢字ワーク
2	例題①	講　義・演　習	課題：漢字ワーク
3	例題②　　利用者に頼まれごとをした場面	講　義・演　習	課題：漢字ワーク
4	例題②	講　義・演　習	課題：漢字ワーク
5	例題③　　利用者にケアの説明を行う場面	講　義・演　習	課題：漢字ワーク
6	例題③	講　義・演　習	課題：漢字ワーク
7	例題④　　利用者のご家族への対応方法	講　義・演　習	課題：漢字ワーク
8	例題④	講　義・演　習	課題：漢字ワーク
9	例題⑤　　スタッフ間の連携方法	講　義・演　習	課題：漢字ワーク
10	例題⑤	講　義・演　習	課題：漢字ワーク
11	例題⑥　利用者へレクリエーション参加の声掛け	講　義・演　習	課題：漢字ワーク
12	例題⑥	講　義・演　習	課題：漢字ワーク
13	例題⑦　　利用者の死に直面した場面	講　義・演　習	課題：漢字ワーク
14	例題⑦	講　義・演　習	課題：漢字ワーク
15	筆記テスト		

[使用テキスト・参考文献]

漢字ワークブック

講師持参資料

[評価方法]

筆記試験　８０％

授業態度　１０％

出席状況　１０％

授　業　概　要

科目名	授業方法	授業担当者	実務経験
アクティビティ演習 書　道	演　習	岡田　寿美	有

授業の回数	時間数(単位数)	配当学年・時期	必修・選択
15回	30時間（1）	1学年・後期	選　　択

[授業の目的]

文字を学ぶ事を通し、集中力を高め、落ち着いた時間から生活の質の向上へつなげていくこと、また、自身のスキルアップにつなげる事を目的とする

[授業の概要]

現代社会の基礎的問題を理解し、社会を見つめる感性や現代を生きる人間としての生き方について考える力を養う学習とする。
豊かな人間性を育み、対人関係構築への一助となるよう感性を磨くために
精神を落ち着かせ、正しい文字の書き方について練習を重ねる

[到達目標]

課題の文字を書くことにより、記録を書く上でも大切となる文字を
読む側の気持ちも考え丁寧に正確に書くことが出来る。

[授業計画]

回	授業内容	方　法	備　考
1	ペン字　練習①	演　習	
2	ペン字　練習②	演　習	
3	ペン字　練習③	演　習	
4	ペン字　練習④	演　習	
5	硬筆　　練習①	演　習	
6	硬筆　　練習②	演　習	
7	硬筆　　練習③	演　習	
8	硬筆　　練習④	演　習	
9	書道　　練習①	演　習	
10	書道　　練習②	演　習	
11	書道　　練習③	演　習	
12	書道　　練習④	演　習	
13	書道　　練習⑤	演　習	
14	作品作成	演　習	
15	作品作成		

[使用テキスト・参考文献]

講師持参資料

[評価方法]

提出作品　５０％
授業態度　３０％
出席状況　２０％

授　業　概　要

科目名	授業方法	授業担当者	実務経験
アクティビティ演習 音　楽	演　習	今城　美津	有

授業の回数	時間数(単位数)	配当学年・時期	必修・選択
15回	30時間（1）	2学年・前期	選　　択

[授業の目的]

高齢者と関わる場面が多くありコミュニケーションの1つとして『音楽』を組み入れ、対人関係構築のための一助となるよう学習する

[授業の概要]

現代社会の基礎的問題を理解し、社会を見つめる感性や現代を生きる人間としての生き方について考える力を養う学習とする。
豊かな人間性を育み、対人関係構築への一助となるよう感性を磨くために
日本の文化に欠かせない『童謡』や『手遊びうた』また、手話を用いた歌唱など介護福祉士として寄り添うきっかけになるものについて学ぶ

[到達目標]

（1）日本・世界の音楽にふれることができる
（2）手遊びうたを覚える（2曲以上）
（3）手話を使った歌を覚える（2曲以上）

[授業計画]

回	授業内容	方　法	備　考
1	日本の童謡にふれる	演　習	
2	日本の童謡にふれる	演　習	
3	日本の童謡にふれる	演　習	
4	世界の童謡にふれる	演　習	
5	世界の童謡にふれる	演　習	
6	手遊びうた	演　習	
7	手遊びうた	演　習	
8	手遊びうた	演　習	
9	手遊びうた	演　習	
10	手話を用いた歌唱	演　習	
11	手話を用いた歌唱	演　習	
12	手話を用いた歌唱	演　習	
13	手話を用いた歌唱	演　習	
14	発表会	演　習	
15			

[使用テキスト・参考文献]

講師持参資料

[評価方法]

筆記試験　８０％
授業態度　１０％
出席状況　１０％

授　業　概　要

科目名	授業方法	授業担当者	実務経験
アクティビティ演習 美　術	演　習	上岡　貞夫	有

授業の回数	時間数(単位数)	配当学年・時期	必修・選択
15回	30時間（1）	1学年・後期	選　　択

[授業の目的]

美術を学ぶ事は制作の技術を身につけるだけでなく、自由に発想し、思い描いたものを実現する手段を知る方法である。集中した時間から心を落ち着かせたり、柔軟な思考から介護現場においても役立つ学習とする

[授業の概要]

基本的問題を見つめる感性や現代を生きる人間としての生き方について考え
豊かな人間性を育み、対人関係構築への一助となるよう感性を磨くために
精神を落ち着かせ、デッサンや、水彩画に取り組み自由な発想から生まれる感性を大切にし、観察すること、考える事につなげることが出来る

[到達目標]

（1）　課題デッサンを作成する
（2）　課題水彩画を作り上げる

[授業計画]

回	授業内容	方　法	備　考
1	デッサン	演　習	
2	デッサン	演　習	
3	デッサン	演　習	
4	デッサン	演　習	
5	デッサン	演　習	
6	水彩画	演　習	
7	水彩画	演　習	
8	水彩画	演　習	
9	水彩画	演　習	
10	水彩画	演　習	
11	水彩画	演　習	
12	水彩画	演　習	
13	水彩画	演　習	
14	水彩画	演　習	
15	水彩画　　仕上げ	演　習	

[使用テキスト・参考文献]

講師持参資料

[評価方法]

提出作品　８０％
授業態度　１０％
出席状況　１０％

授　業　概　要

科目名	授業方法	授業担当者	実務経験
介護の基本Ⅰ	講義　・　演習	西本　房乃	有

授業の回数	時間数(単位数)	配当学年・時期	必修・選択
30回	60時間（2）	1学年・前期	必　　修

[授業の目的]

介護福祉の基本となる理念や、地域を基盤とした生活の継続性を支援するためのしくみを理解し、介護福祉の専門職としての能力と態度を養う学習とする

[授業の概要]

介護の基本では、介護福祉の基本となる理念を理解し、介護福祉士としての倫理に基づき、その役割と機能である、介護を必要とする人の理解と生活を支えるしくみ自立支援、介護実践における安全とリスクマネジメント、他職種連携、介護従事者の安全に関して、介護実践の基礎となる知識を学ぶ

[到達目標]

（1）複雑化・多様化・高度化する介護ニーズ及び介護福祉を取り巻く状況を社会的な課題として捉え、尊厳の保持や自立支援という介護福祉の基本となる理念を理解できるようにする

（2）地域や施設・在宅の場や、介護予防や看取り、災害時等の場面や状況における、介護福祉士の役割と機能を理解できるようにする

（3）介護福祉の専門性と倫理を理解し、介護福祉士に求められる専門職としての態度を養う

[授業計画]

回	授業内容	方　法	備　考
1	介護の成り立ちと介護を取り巻く状況 介護サービスと家族介護のバランス	講　義 演　習	
2	介護福祉の歴史①　老人福祉法の制定に至るまで	講　義	
3	介護福祉の歴史②　1970・1980年代	講　義	
4	介護福祉の歴史③　1990・2000年以降	講　義	
5	今後対応が必要な介護問題を考える	演　習	
6	介護福祉の理念とは・尊厳を支える介護	講　義	
7	自立を支える介護	講　義	
8	尊厳を支える介護・利用者主体の自立を支えるために必要な自己決定権	演　習	
9	社会福祉士及び介護福祉法	講　義	
10	社会福祉士及び介護福祉法に関連する諸規定	講　義	
11	心身の状況に応じた介護を考える	演　習	
12	介護福祉士の義務規定		
13	介護福祉士の活動の場と役割　地域包括ケアシステム	講　義	
14	介護福祉士の活動の場と役割　介護予防	講　義	
15	介護福祉士の活動の場と役割　医療的ケア	講　義	
16	介護福祉士の活動の場と役割　ターミナルケア・災害時支援	講　義	
17	介護福祉士の活動の場と役割	演　習	
18	介護福祉士に求められる役割とその養成	講　義	

19	介護福祉士を支える団体	講　義	
20	介護福祉士を支える団体	講　義	
21	介護福祉士を支える団体	講　義	
22	介護福祉士を支える団体	講　義	
23	介護福祉士を支える団体についてまとめ発表	演　習	
24			
25	介護福祉士の倫理　　介護実践における倫理	講　義	
26	介護福祉士の倫理　　倫理的対応が必要な事例	講　義	
27	介護福祉士の倫理	演　習	
28	利用者の尊厳を保持した倫理的介護実践	演　習	
29			
30	筆記テスト		

[使用テキスト・参考文献] 介護福祉士養成講座３ 介護の基本Ⅰ	[評価方法] 筆記試験　８０％ 授業態度　１０％ 出席状況　１０％

授　業　概　要

科目名	授業方法	授業担当者	実務経験
介護の基本Ⅱ	講義　・　演習	西本　房乃	有

授業の回数	時間数(単位数)	配当学年・時期	必修・選択
30回	60時間（2）	２学年・前期	必　修

[授業の目的]

介護福祉の基本となる理念や、地域を基盤とした生活の継続性を支援するためのしくみを理解し、介護福祉の専門職としての能力と態度を養う学習とする

[授業の概要]

介護の基本では、介護福祉の基本となる理念を理解し、介護福祉士としての倫理に基づき、その役割と機能である、介護を必要とする人の理解と生活を支えるしくみ自立支援、介護実践における安全とリスクマネジメント、他職種連携、介護従事者の安全に関して、介護実践の基礎となる知識を学ぶ

[到達目標]

（１）ICFの視点に基づくアセスメントを理解し、エンパワメントの観点から個々の状態に応じた自立を支援するための環境整備や介護予防、リハビリテーション等の意義や方法を理解できるようにする

（２）介護を必要とする人の生活の個別性に対応するために、生活の多様性や社会とのかかわりを理解できるようにする

（３）介護を必要とする人の生活を支援するという観点から介護サービスや地域連携など、フォーマル、インフォーマルな支援を理解できるようになる

[授業計画]

回	授業内容	方　法	備　考
1	介護福祉における自立支援① 考え方・利用者理解の視点・意思決定支援	講　義	
2	介護福祉における自立支援② 生活意欲と活動・就労支援・自立と生活支援	講　義	
3	利用者の意思決定を支援する	演　習	
4	ICFの考え方　介護におけるICFのとらえ方	講　義	
5	高齢者のストレングス	演　習	
6	自立支援とリハビリテーション① 実際・障害の理解と評価	講　義	
7	自立支援とリハビリテーション② 自立のとらえ方・介護福祉士の役割	講　義	
8	リハビリテーションの理念・介護福祉士の役割	演　習	
9	自立支援と介護予防① 介護予防の概要・種類と展開・高齢者の身体特性	講　義	
10	自立支援と介護予防② 介護予防の実際・介護福祉士の役割	講　義	
11	介護予防における介護福祉士の役割	演　習	
12	介護福祉を必要とする人の理解① 生活とは・大切な要素・特性・しづらさに対する支援	講　義	
13	介護福祉を必要とする人の理解② 介護福祉を必要とする人たちの暮らし	講　義	
14	介護福祉を必要とする人の理解③ 「その人らしさ」と「生活ニーズ」の理解	講　義	

15	介護福祉を必要とする人の理解④ 生活のしづらさの理解とその支援	講　義	
16	介護福祉を必要とする人の生活を支えるしくみ	講　義	
17	生活を支えるフォーマルサービス（社会的サービス）とは	講　義	
18	生活を支えるインフォーマルサービス（私的サービス）とは	講　義	
19	生活を支えるフォーマルサービス（社会的サービス） インフォーマルサービス（私的サービス）とは GWをして発表準備（PPT作成）	演　習	
20		演　習	
21		演　習	
22		演　習	
23	地域連携①	講　義	
24	地域連携②	講　義	
25	地域連携③	講　義	
26	利用者の意思決定を支援する 高齢者のストレングス リハビリテーションの理念・介護福祉士の役割 介護予防における介護福祉士の役割 今までの演習を含め発表会を実施	演　習	
27		演　習	
28		演　習	
29		演　習	
30	筆記テスト		

[使用テキスト・参考文献] 介護福祉士養成講座３ 介護の基本Ⅰ 介護福祉士養成講座４ **介護の基本Ⅱ**	[評価方法] 筆記試験　８０％ 授業態度　１０％ 出席状況　１０％

授　業　概　要

科目名	授業方法	授業担当者	実務経験
介護の基本Ⅲ	講義　・　演習	西本　房乃	有

授業の回数	時間数(単位数)	配当学年・時期	必修・選択
３０回	60時間（２）	２学年・後期	必　　修

[授業の目的]

介護福祉の基本となる理念や、地域を基盤とした生活の継続性を支援するためのしくみを理解し、介護福祉の専門職としての能力と態度を養う学習とする

[授業の概要]

介護の基本では、介護福祉の基本となる理念を理解し、介護福祉士としての倫理に基づき、その役割と機能である、介護を必要とする人の理解と生活を支えるしくみ自立支援、介護実践における安全とリスクマネジメント、他職種連携、介護従事者の安全に関して、介護実践の基礎となる知識を学ぶ

[到達目標]

（１）多職種協働による介護を実践するために、保健・医療・福祉に関する他の種類の専門性や役割と機能を理解できるようにする

（２）介護におけるリスクマネジメントの必要性を理解するとともに、安全の確保のための基礎的な知識や事故への対応を理解できるようにする

（３）介護従事者自身が心身ともに健康に、介護実践するための健康管理や労働環境の管理について理解できるようにする

[授業計画]

回	授業内容	方　法	備　考
1	介護における安全の確保とリスクマネジメント	講　義	
2	リスクマネジメントとは何か	講　義	
3	感染症対策	講　義	
4	身体拘束の廃止について　GW・発表準備	演　習	
5	感染予防のための観察ポイント　GW・発表準備	演　習	
6	発表会　第3章についての学びを共有	演　習	
7		演　習	
8	協働する多職種の機能と役割① 多職種連携・協働の必要性	講　義	
9	協働する多職種の機能と役割② 多職種連携・協働に求められる基本的な能力	講　義	
10	協働する多職種の機能と役割③ 保健・医療・福祉職の役割と機能①	講　義	
11	協働する多職種の機能と役割④ 保健・医療・福祉職の役割と機能②	講　義	
12	協働する多職種の機能と役割⑤ 多職種連携・協働の実際	講　義	
13	多職種連携・協働と社会の働きについて	演　習	
14	チームに備わっているべき要素について	演　習	
15	発表会　第4章について学びを共有する	演　習	
16		演　習	
17	介護従事者の安全　健康管理の意義と目的①	講　義	
18	介護従事者の安全　健康管理の意義と目的②	講　義	

19	介護従事者の安全　　こころの健康管理①	講　義	
20	介護従事者の安全　　こころの健康管理②	講　義	
21	ストレスの影響とこころの健康をよりよく保つための対処方法について	演　習	
22			
23	身体の健康管理	講　義	
24	腰痛予防のための注意点　　GW・発表準備	演　習	
25	腰痛予防のための注意点　　発表会	演　習	
26	労働環境の整備	講　義	
27	さまざまな職種についてグループごとにまとめて発表できるよう準備を行う	演　習	
28	さまざまな職種について発表を行う	演　習	
29			
30	筆記テスト		

[使用テキスト・参考文献] 介護福祉士養成講座４ 介護の基本Ⅱ	[評価方法] 筆記試験　８０％ 授業態度　１０％ 出席状況　１０％

授　業　概　要

科目名	授業方法	授業担当者	実務経験
コミュニケーション技術Ⅰ	講義　・　演習	山下　美登世	無

授業の回数	時間数(単位数)	配当学年・時期	必修・選択
15回	30時間（1）	1学年・前期	必　修

[授業の目的]

対象者との支援関係の構築やチームケアを実践するためのコミュニケーションの意義や技法を学び、介護実践に必要なコミュニケーション能力を養う学習とする

[授業の概要]

コミュニケーション技術では、人間関係とコミュニケーションで学ぶコミュニケーションの基礎的な知識を基盤に、本人及び家族とのより良い関係性の構築や障害の特性に応じたコミュニケーションの基本的な知識・技術を習得する。介護におけるチームのコミュニケーションについて、情報共有の意義、活用、管理などの関する基本知識・技術を習得する

[到達目標]

（1）本人の置かれている状況を理解し、支援関係の構築や意思決定を支援するためのコミュニケーションの基本的な技術が身につくようにする

（2）家族の置かれている状況・場面を理解し、家族への支援やパートナーシップを構築するためのコミュニケーションの基本的な技術が身につくようにする

[授業計画]

回	授業内容	方　法	備　考
1	介護におけるコミュニケーションの基本	講　義	
2	介護におけるコミュニケーションの対象	講　義	
3	援助関係とコミュニケーション	講　義	
4	コミュニケーション態度に関する基本技術	講　義	
5	話を聴く態度	演　習	
6	言語・非言語・準言語コミュニケーションの基本	講　義	
7	感情を表す言葉	演　習	
8	目的別のコミュニケーション技術	講　義	
9	意思決定を支援するためのコミュニケーション	講　義	
10	リフレーミングとは	講　義	
11	リフレーミングのトレーニング	演　習	
12	集団におけるコミュニケーション技術	講　義	
13	グループで思い出話をする体験	演　習	
14		演　習	
15	筆記テスト		

[使用テキスト・参考文献]

介護福祉士養成講座５
コミュニケーション技術

[評価方法]

筆記試験　８０％
授業態度　１０％
出席状況　１０％

授　業　概　要

科目名	授業方法	授業担当者	実務経験
コミュニケーション技術Ⅱ	講義　・　演習	山下　美登世	無

授業の回数	時間数(単位数)	配当学年・時期	必修・選択
15回	30時間（1）	1学年・後期	必　修

[授業の目的]

対象者との支援関係の構築やチームケアを実践するためのコミュニケーションの意義や技法を学び、介護実践に必要なコミュニケーション能力を養う学習とする

[授業の概要]

コミュニケーション技術では、人間関係とコミュニケーションで学ぶコミュニケーションの基礎的な知識を基盤に、本人及び家族とのより良い関係性の構築や障害の特性に応じたコミュニケーションの基本的な知識・技術を習得する。介護におけるチームのコミュニケーションについて、情報共有の意義、活用、管理などの関する基本知識・技術を習得する

[到達目標]

（1）障害の特性に応じたコミュニケーションの基本的技術が身につくようにする

（2）情報を適切にまとめ、発信するために、介護実践における情報の共有化の意義を理解しその具体的な方法や情報の管理について理解できるようにする

[授業計画]

回	授業内容	方　法	備　考
1	コミュニケーション障害への対応の基本	講　義	
2	わたしのコミュニケーションスタイル	演　習	
3	さまざまなコミュニケーション障害のある人への支援	講　義	
4	さまざまなコミュニケーション障害のある人への支援	講　義	
5	構音障害・失語症の人への支援について	演　習	
6			
7	家族とのコミュニケーション　関係作り・助言・指導・調整・家族関係と介護ストレスへの対応	講　義	
8	介護におけるチームのコミュニケーションとは	講　義	
9	報告・連絡・相談の技術	講　義	
10	記録の技術　介護記録の書き方	講　義	
11	会議・議事進行・説明の技術	講　義	
12	事例検討に関する技術	講　義	
13	情報の活用と管理のための技術	演　習	
14	プレゼンテーション会議・ケアカンファレンス他	演　習	
15	筆記テスト		

[使用テキスト・参考文献]

介護福祉士養成講座５

コミュニケーション技術

[評価方法]

筆記試験　８０％

授業態度　１０％

出席状況　１０％

授　業　概　要

科目名	授業方法	授業担当者	実務経験
生活支援技術A（家政学）	講義　・　演習	下元　智世	有

授業の回数	時間数(単位数)	配当学年・時期	必修・選択
15回	30時間（1）	1学年・前期	必　修

[授業の目的]

尊厳の保持や自立支援、生活の豊かさの観点から、本人主体の生活が継続できるよう、根拠に基づいた介護実践を行うための知識・技術を習得する学習とする

[授業の概要]

生活支援技術では、ICFの視点を生活支援に活かすことの意義を理解し、自立に向けた移動、身支度、食事、入浴、清潔保持、排泄、家事、休息、睡眠、人生の最終段階における介護、福祉用具の意義と活用について基礎的な知識・技術を学ぶ

[到達目標]

生活の豊かさや心身の活性化、自立支援のための居住環境の整備について基礎的な知識を理解できるようにする

[授業計画]

回	授業内容	方　法	備　考
1	生活支援の理解	講　義	
2	生活支援の介護過程	講　義	
3	生活支援とチームアプローチ	講　義	
4	生活を理解する・目の動きを大切にする	演　習	
5	自立した家事とは	講　義	
6	家事の介護をするために介護福祉士がすべきこと	講　義	
7	調理・洗濯・掃除・ゴミ捨てについて	講　義	
8	裁縫（衣類の補習）・衣類寝具の衛生管理・買い物・家庭経営、家計の管理について	講　義	
9	家事の介護における多職種連携の必要性<在宅>	講　義	
10	家事の介護における多職種連携の必要性<施設>	講　義	
11	買い物に行く際の留意点・食事作りにおける減塩方法・衣服のしみの取り方	演　習	
12			
13	グループ学習の発表	演　習	
14	買い物に行く際の留意点・食事作りにおける減塩方法・衣服のしみの取り方		
15	筆記テスト		

[使用テキスト・参考文献]

介護福祉士養成講座６

生活支援技術Ⅰ

[評価方法及]

筆記試験　８０％

授業態度　１０％

出席状況　１０％

授　業　概　要

科目名	授業方法	授業担当者	実務経験
生活支援技術B（住環境）	講義　・　演習	下元　智世	有

授業の回数	時間数(単位数)	配当学年・時期	必修・選択
15回	30時間（1）	1学年・前期	必　　修

[授業の目的]

尊厳の保持や自立支援、生活の豊かさの観点から、本人主体の生活が継続できるよう、根拠に基づいた介護実践を行うための知識・技術を習得する学習とする

[授業の概要]

生活支援技術では、ICFの視点を生活支援に活かすことの意義を理解し、自立に向けた居住環境における介護、福祉用具の意義と活用について基礎的な知識・技術を学ぶ

[到達目標]

生活の豊かさや心身の活性化、自立支援のための居住環境の整備について基礎的な知識を理解できるようにする

[授業計画]

回	授業内容	方　法	備　考
1	住まいの役割と機能	講　義	
2	生活空間	講　義	
3	快適な室内環境①	講　義	
4	快適な室内環境②	講　義	
5	安全に暮らすための生活環境①	講　義	
6	安全に暮らすための生活環境②	講　義	
7	居住環境の整備における多職種との連携	講　義	
8	居住環境の整備における多職種との連携	講　義	
9	居住環境の整備における多職種との連携	講　義	
10	居住環境の整備における多職種との連携	講　義	
11	快適な室内環境の条件	演　習	
12	自宅で生活を続けるための環境整備		
13	グループ学習の発表会	演　習	
14	快適な室内環境の条件・自宅で生活を続けるための環境整備		
15	筆記テスト		

[使用テキスト・参考文献]

介護福祉士養成講座６

生活支援技術Ⅰ

[評価方法]

筆記試験　８０％

授業態度　１０％

出席状況　１０％

授　業　概　要

科目名	授業方法	授業担当者	実務経験
生活支援技術C（調理）	講義　・　演習	下元　智世	有

授業の回数	時間数(単位数)	配当学年・時期	必　修・選　択
15回	30時間（1）	1学年・後期	必　修

[授業の目的]

尊厳の保持や自立支援、生活の豊かさの観点から、本人主体の生活が継続できるよう、根拠に基づいた介護実践を行うための知識・技術を習得する学習とする

[授業の概要]

生活支援技術では、ICFの視点を生活支援に活かすことの意義を理解し、自立に向けた食事・調理における介護、福祉用具の意義と活用について基礎的な知識・技術を学ぶ

[到達目標]

生活の継続性を支援する観点から、対象者が個々の状態に応じた家事を自立的に行うことを支援するための、基礎的な知識・技術を習得できるようにする

[授業計画]

回	授業内容	方　法	備　考
1	自立に向けた食事の介護	講　義	
2	自立した食事の一連の流れ	講　義	
3	自立に向けた食事の介護のため介護福祉職がすべきこと	講　義	
4	食事の介助を行うにあたって	講　義	
5	介護の基本原則にのっとった食事の介護	講　義	
6	誤嚥の予防のための支援	講　義	
7	窒息が起きたときの対応	講　義	
8	食後の口腔ケア	講義・演習	
9			
10	食事の介護における多職種連携の必要性 他職種の役割と介護福祉職との連携	講　義	
11	食事の姿勢・1日の水分摂取量・食事の環境	演　習	
12			
13	グループ学習の発表会	演　習	
14	食事の姿勢・1日の水分摂取量・食事の環境		
15	筆記テスト		

[使用テキスト・参考文献]

介護福祉士養成講座６

生活支援技術Ⅰ

[評価方法]

筆記試験　８０％

授業態度　１０％

出席状況　１０％

授　業　概　要

科目名	授業方法	授業担当者	実務経験
生活支援技術D（被服）	講義　・　演習	下元　智世	有

授業の回数	時間数(単位数)	配当学年・時期	必　修・選　択
15回	30時間（1）	1学年・後期	必　修

[授業の目的]

尊厳の保持や自立支援、生活の豊かさの観点から、本人主体の生活が継続できるよう、根拠に基づいた介護実践を行うための知識・技術を習得する学習とする

[授業の概要]

生活支援技術では、ICFの視点を生活支援に活かすことの意義を理解し、自立に向けた身支度における介護、福祉用具の意義と活用について基礎的な知識・技術を学ぶ

[到達目標]

生活の豊かさや心身の活性化、自立支援のための被服について基礎的な知識を理解できるようにする

[授業計画]

回	授業内容	方　法	備　考
1	自立に向けた身じたくとは	講　義	
2	衣服の着脱の介助　衣服のもつ役割	講　義	
3	衣服の着脱の介助 利用者の状況に合わせた衣服着脱の視点	講　義	
4	身じたくの介護における多職種の連携	講　義	
5	身じたくの介護における多職種の連携	講　義	
6	身じたくの介護における多職種の連携	講　義	
7	身じたくの介護における多職種の連携	講　義	
8	身じたくの介護における多職種の連携	講義・演習	
9	着替えの介助　利用者に応じた方法①	演　習	
10			
11	着替えの介助　利用者に応じた方法②	演　習	
12			
13	着替えの介助　利用者に応じた方法③	演　習	
14			
15	筆記テスト		

[使用テキスト・参考文献]

介護福祉士養成講座７
生活支援技術Ⅱ

[単位認定]

筆記試験　８０％
授業態度　１０％
出席状況　１０％

授　業　概　要

科目名	授業方法	授業担当者	実務経験
生活支援技術E（介護技術）	講義　・　演習	中川香居・山下美登世・西本房乃・橋本まゆみ・森本京介	無

授業の回数	時間数(単位数)	配当学年・時期	必修・選択
45回	90時間（3）	1年全期	必　　修

[授業の目的]

尊厳の保持や自立支援、生活の豊かさの観点から、本人主体の生活が継続できるよう、根拠に基づいた介護実践を行うための知識・技術を習得する学習とする

[授業の概要]

生活支援技術では、ICFの視点を生活支援に活かすことの意義を理解し、自立に向けた移動、入浴、清潔保持、排泄、休息、睡眠、人生の最終段階における介護、福祉用具の意義と活用について基礎的な知識・技術を学ぶ

[到達目標]

対象者の能力を活用・発揮し、自立を支援するための生活支援技術の基本を習得する。また実践の根拠について、説明できる能力が身につくようにする

[授業計画]

回	授業内容	方　法	備　考
1	自立に向けた移動の介護　　基礎	講　義・演　習	
2	自立に向けた移動の介護　　介助方法	講　義・演　習	
3	自立に向けた移動の介護　　多職種連携の必要施	講　義・演　習	
4	自立に向けた移動の介護　　福祉用具の活用	講　義・演　習	
5	福祉用具の意義・重要性・種類	講　義	
6	適切な福祉用具を選ぶための視点	講　義	
7	応急手当の知識と技術	講　義	
8	応急手当の実際　　救急車の手配方法　他	演　習	
9			
10	災害時における生活支援　　介護福祉士の役割	講　義	
11	災害時における生活支援	講　義	
12	地域のハザードマップの作成	演　習	
13	身のまわりの防災に関する図記号について		
14	自立に向けた入浴・清潔保持の介護とは	講　義	
15	入浴の介助方法	講　義・演　習	
16	入浴の介助方法	講　義・演　習	
17	入浴の介助方法	講　義・演　習	
18	入浴・清潔保持のための道具・用具	講　義	
19	入浴・清潔保持の介護における多職種との連携	講　義	
20	からだの洗い方の好み 乾いたタオルでからだを拭く意味	演　習	
21	自立に向けた排泄の介護とは	講　義	
22	排泄方法の選択・トイレでの排泄の介助方法	講　義・演　習	
23	立位でのパット交換の介助方法	講　義・演　習	
24	尿器・差し込み便器での介助方法	講　義・演　習	
25	オムツでの排泄介助の方法	講　義・演　習	
26	さまざまな症状（頻尿・尿失禁・便秘・下痢など）時の対応	講　義・演　習	
27	オムツ体験・オムツの吸水性	講　義	

28	休息・睡眠の介護と安眠を阻害する因子	講　義	
29	室内環境の調整とは（ベッドメイキング）	講　義・演　習	
30			
31			
32			
33	人生の最終段階における介護・死生観	講　義	
34	自己決定の支援・地域ごとの埋葬習慣について調べる	演　習	
35	埋葬習慣など発表（地域・国・宗教など）	演　習	
36			
37	介護技術練習	演　習	
38	介護技術練習	演　習	
39	介護技術練習	演　習	
40	介護技術練習	演　習	
41	筆記試験		
42	介護技術試験		
43			
44			
45			

[使用テキスト・参考文献] 介護福祉士養成講座６ 生活支援技術Ⅰ 介護福祉士養成講座７ 生活支援技術Ⅱ	[評価方法] （試験やレポートの評価基準など） 筆記テスト　４０％ 技術テスト　４０％ 授業態度　　１０％ 出席状況　　１０％

授　業　概　要

科目名	授業方法	授業担当者	実務経験
生活支援技術F（聴覚・言語）	講義　・　演習	前田　真紀	有

授業の回数	時間数(単位数)	配当学年・時期	必修・選択
15回	30時間（1）	2学年・前期	必　　修

[授業の目的]

生活支援の理解として尊厳の保持や自立支援、生活の豊かさの観点から、本人主体の生活が継続できるよう、根拠に基づいた介護実践を行うための知識・技術を習得する学習とする

[授業の概要]

生活支援技術Fでは、ICFの視点を生活支援に活かすことの意義を理解し、生活の豊かさや心身の活性化のための支援となるよう学習したうえで、聴覚言語に障害のある人への自立に向けた介護の意義や活用について基礎的な知識・技術を学ぶ

[到達目標]

生活の豊かさや心身の活性化、自立支援のための基礎的な知識を理解できるようにする
障害に合わせて介護の在り方を学び、根拠に基づいた援助技術を学び実践につなげることができる事ができる

[授業計画]

回	授業内容	方　法	備　考
1	聴覚障害の理解	講　義	
2	生活上の困りごと（観察の視点）聴覚障害	講　義	
3	支援の展開-聴覚障害	講　義	
4	事例で学ぶ聴覚障害	講　義	
5	手話を学ぶ（基礎編）	講義・演習	
6	手話を学ぶ（基礎編）	講義・演習	
7	手話を学ぶ（基礎編）	講義・演習	
8	手話を学ぶ（基礎編）	講義・演習	
9	言語障害の理解	講　義	
10	生活上の困りごと（観察の視点）言語障害	講　義	
11	支援の展開―言語障害	講　義	
12	事例で学ぶ言語障害	講　義	
13	手話を学ぶ（応用編）	講義・演習	
14	手話を学ぶ（応用編）	講義・演習	
15	筆記テスト		

[使用テキスト・参考文献]

介護福祉士養成講座８
生活支援技術Ⅲ

[評価方法]

筆記試験　８０％
授業態度　１０％
出席状況　１０％

授　業　概　要

科目名	授業方法	授業担当者	実務経験
生活支援技術G （リハビリテーション）	講義　・　演習	冨田　豊	有

授業の回数	時間数(単位数)	配当学年・時期	必修・選択
15回	30時間（1）	2学年・前期	必　　修

[授業の目的]

生活支援の理解として尊厳の保持や自立支援、生活の豊かさの観点から、本人主体の生活が継続できるよう、根拠に基づいた介護実践を行うための知識・技術を習得する学習とする

[授業の概要]

生活支援技術Gでは、ICFの視点を生活支援に活かすことの意義を理解し、自立に向けた移動の介護や生活を支援するために必要なリハビリテーションについて学び、福祉用具の意義と活用について基礎的な知識・技術を学ぶ

[到達目標]

リハビリテーションを学び障害に合わせて介護の在り方、根拠に基づいた援助技術の方法を知り実践につなげることができる事ができる

[授業計画]

回	授業内容	方　法	備　考
1	介護とリハビリテーション	講　義	
2	生活上の困りごと（観察・援助の視点）	講　義	
3	支援の展開-知的障害	講　義	
4	事例で学ぶ知的障害に応じた生活支援の実際	講　義	
5	肢体不自由に応じた介護・その理解	講　義	
6	肢体不自由生活上の困りごと（観察・援助の視点）	講　義	
7	支援の展開-肢体不自由	講　義	
8	事例で学ぶ肢体不自由に応じた生活支援の実際	講　義	
9	重複障害＜盲ろう＞に応じた介護　重複障害とは	講　義	
10	盲ろう重複障害の理解	講　義	
11	重複障害＜盲ろう＞生活の困りごと（観察・援助の視点）	講　義	
12	さまざまな介護福祉用具の意義と使用方法①	演　習	
13	さまざまな介護福祉用具の意義と使用方法②	演　習	
14	さまざまな介護福祉用具の意義と使用方法③	演　習	
15	筆記テスト		

[使用テキスト・参考文献]

介護福祉士養成講座８

生活支援技術Ⅲ

[評価方法]

筆記試験　８０％

授業態度　１０％

出席状況　１０％

授　業　概　要

科目名	授業方法	授業担当者	実務経験
生活支援技術H （障害別）	講義　・　演習	中川　香居	無

授業の回数	時間数(単位数)	配当学年・時期	必修・選択
15回	30時間（1）	2学年・前期	必　　修

[授業の目的]

生活支援の理解として尊厳の保持や自立支援、生活の豊かさの観点から、本人主体の生活が継続できるよう、
根拠に基づいた介護実践を行うための知識・技術を習得する学習とする

[授業の概要]

生活支援技術Hでは、ICFの視点を生活支援に活かすことの意義を理解し、生活の豊かさや心身の活性化のための支援となるよう学習をしたうえで、様々な障害における介護の実際や基礎的な知識・技術を学ぶ

[到達目標]

障害に合わせて介護の在り方を学び、根拠に基づいた援助技術を学び実践につなげることができる事ができる

[授業計画]

回	授業内容	方　法	備　考
1	視覚障害の応じた介護・視覚障害の理解	講　義	
2	生活上の困りごと（観察の視点）	講　義	
3	支援の展開-視覚障害	講　義	
4	事例で学ぶ視覚障害に応じた生活支援の実際	講　義	
5	内部障害に応じた介護（心機能障害）	講　義	
6	内部障害に応じた介護（呼吸器機能障害）	講　義	
7	内部障害に応じた介護（腎機能・肝機能障害）	講　義	
8	内部障害に応じた介護（膀胱・直腸機能障害）	講　義	
9	内部障害に応じた介護（小腸機能障害）	講　義	
10	内部障害に応じた介護（HIVによる免疫機能障害）	講　義	
11	内部障害に応じた介護（重症心身障害）	講　義	
12	精神障害・高次脳機能障害・発達障害に応じた介護	講　義	
13	難病に応じた介護	講　義	
14	さまざまな障害のある人への介護	演　習	
15	筆記テスト		

[使用テキスト・参考文献]

介護福祉士養成講座８
生活支援技術Ⅲ

[評価方法]

筆記試験　８０％
授業態度　１０％
出席状況　１０％

授　業　概　要

科目名	授業方法	授業担当者	実務経験
介護過程Ⅰ	講義　・　演習	西本房乃・森田婦美子	有

授業の回数	時間数(単位数)	配当学年・時期	必修・選択
３０回	60時間（２）	1学年・前期	必　修

[授業の目的]

本人の望む生活の実現に向けて、生活課題の分析を行い、根拠に基づく介護実践を伴う課題解決の思考過程を習得する学習とする

[授業の概要]

介護過程では、介護過程の意義・目的及び介護過程展開の一連のプロセスに関する基礎的理解について、介護総合演習や、介護実習、生活支援技術など、他の科目との連動を視野に入れて、介護過程を展開できる能力を養う

[到達目標]

本人の望む生活の実現に向けて、生活環境の分析を行い、根拠に基づく介護実践を伴う課題解決の思考過程を習得することができる

[授業計画]

コマ数	授業内容	方　法	備　考
1	介護過程とは・目的・意義	講　義	
2	介護過程の全体像	講　義	
3	介護過程の展開の理解	演　習	
4			
5	演習後の発表　　どう考えたのか	演　習	
6	介護過程における事例検討(ケースカンファレンス)	講義・演習	
7	介護過程における事例検討(ケースカンファレンス)	講義・演習	
8	介護過程における事例研究（ケーススタディ）	講　義	
9	倫理的な配慮	講　義	
10	介護福祉分野で使用する「計画」	講　義	
11	介護過程の理解①　　介護過程の展開	講　義	
12	介護過程の理解②　　アセスメント	講　義	
13	介護過程の理解③　　介護計画の立案	講　義	
14	介護過程の理解④　　介護の実施	講　義	
15	介護過程の理解⑤　　評価	講　義	
16	アセスメント　情報収集の意義	講　義	
17	情報収集の方法（ICFモデルの活用）	講　義	
18	情報収集とは・情報収集とICF	演　習	
19			
20	アセスメント（解釈・関連付け・統合化）①	講　義	
21	アセスメント（解釈・関連付け・統合化）②	講　義	
22	アセスメント（解釈・関連付け・統合化）③	講　義	
23	アセスメントの確認・情報の解釈をしてみよう	演　習	
24	情報の質と量の大切さを考える		
25	介護計画の立案	講　義	
26	介護の実施	講　義	
27	評価	講　義	
28	介護過程における評価の確認	演　習	
29	介護計画の立案にいける留意点	演　習	

30	筆記テスト		

[使用テキスト・参考文献] 介護福祉士養成講座９ 介護過程	[評価方法] （試験やレポートの評価基準など） 筆記テスト　６０％ 提出物　２０％ 授業態度　１０％ 出席状況　１０％

授　業　概　要

科目名	授業方法	授業担当者	実務経験
介護過程Ⅱ	講義　・　演習	西本房乃・森田婦美子	有

授業の回数	時間数(単位数)	配当学年・時期	必修・選択
15回	30時間（1）	1学年・後期	必　　修

[授業の目的]

本人の望む生活の実現に向けて、個別事例を通じ、生活課題の分析を行い、根拠に基づく介護実践を伴う課題解決の思考過程を習得する学習とする

[授業の概要]

介護過程では、介護過程の意義・目的及び介護過程展開の一連のプロセスに関する基礎的理解、介護過程とチームアプローチ、個別事例を通じた介護過程の展開の実際について、介護総合演習や、介護実習、生活支援技術など、他の科目との連動を視野に入れて、介護過程を展開できる能力を養う

[到達目標]

本人の望む生活の実現に向けて、生活環境の分析を行い、根拠に基づく介護実践を伴う課題解決の思考過程を習得することができる。

介護過程展開の理解について学んだことを活用し模擬事例を用いて実践的に展開を行うことができる

[授業計画]

回	授業内容	方　法	備　考
1	介護過程の実践的展開　グループホーム・認知症事例	講　義	
2	介護過程の実践的展開　グループホーム・認知症事例	講　義	
3	介護過程の実践的展開　グループホーム・認知症事例	講　義	
4	介護過程の実践的展開　グループホーム・認知症事例	講　義	
5	介護過程の実践的展開　脳性麻痺の事例	講　義	
6	介護過程の実践的展開　脳性麻痺の事例	講　義	
7	介護過程の実践的展開　脳性麻痺の事例	講　義	
8	介護過程の実践的展開　在宅における脳血管疾患事例	講　義	
9	介護過程の実践的展開　在宅における脳血管疾患事例	講　義	
10	介護過程の実践的展開　在宅における脳血管疾患事例	講　義	
11	介護過程の実践的展開　介護老人福祉施設ターミナル事例	講　義	
12	介護過程の実践的展開　介護老人福祉施設ターミナル事例	講　義	
13	介護過程の実践的展開　介護老人福祉施設ターミナル事例	講　義	
14	介護過程の実践的展開　介護老人福祉施設ターミナル事例	演　習	
15	筆記テスト		

[使用テキスト・参考文献]

介護福祉士養成講座９

介護過程

[評価方法]

筆記テスト　５０％

提出物　３０％

授業態度　１０％

出席状況　１０％

授　業　概　要

科目名	授業方法	授業担当者	実務経験
介護過程Ⅲ	講義　・　演習	西本房乃・森田婦美子	有

授業の回数	時間数(単位数)	配当学年・時期	必修・選択
30回	60時間（2）	2学年・前期	必　　修

[授業の目的]

本人の望む生活の実現に向けて、生活課題の分析を行い、チームアプローチを学び、根拠に基づく介護実践を伴う課題解決の思考過程を習得する学習とする

[授業の概要]

介護過程Ⅲでは、介護過程とチームアプローチ、個別事例を通じた介護過程の展開の実際について、介護総合演習や、介護実習、生活支援技術など、他の科目との連動を視野に入れて、介護過程を展開できる能力を養う

[到達目標]

本人の望む生活の実現に向けて、生活環境の分析を行い、根拠に基づく介護実践を伴う課題解決の思考過程を習得することができる。また、介護サービス計画や協働する他の専門職のケア計画と個別介護計画との関係性、チームとして介護過程を展開することの意義や方法を理解することができる

[授業計画]

回	授業内容	方　法	備　考
1	介護過程とケアマネジメントについて①	講　義	
2	介護過程とケアマネジメントについて②	講　義	
3	介護過程とケアマネジメントについて③	講　義	
4	ケアマネジメントと介護過程の関係 チームアプローチの意義と実際	演　習	
5			
6	利用者のさまざまな生活と介護過程の展開	講　義	
7	事例で考える利用者の生活と介護過程の展開 ① 都会に住む独居の高齢者の生活支援	講義・演習	
8	事例で考える利用者の生活と介護過程の展開 ① 都会に住む独居の高齢者の生活支援	講義・演習	
9	事例で考える利用者の生活と介護過程の展開 ① 都会に住む独居の高齢者の生活支援	講義・演習	
10	事例で考える利用者の生活と介護過程の展開 ① 都会に住む独居の高齢者の生活支援	講義・演習	
11	事例で考える利用者の生活と介護過程の展開 ② 離島出身の高齢者の在宅復帰支援	講義・演習	
12	事例で考える利用者の生活と介護過程の展開 ③ 離島出身の高齢者の在宅復帰支援	講義・演習	
13	事例で考える利用者の生活と介護過程の展開 ② 離島出身の高齢者の在宅復帰支援	講義・演習	
14	事例で考える利用者の生活と介護過程の展開 ③ 離島出身の高齢者の在宅復帰支援	講義・演習	
15	事例で考える利用者の生活と介護過程の展開 ④ 在宅でターミナルを迎える高齢者と家族の生活支援	講義・演習	
16	事例で考える利用者の生活と介護過程の展開 ④ 在宅でターミナルを迎える高齢者と家族の生活支援	講義・演習	
17	事例で考える利用者の生活と介護過程の展開	講義・演習	

	④在宅でターミナルを迎える高齢者と家族の生活支援			
18	事例で考える利用者の生活と介護過程の展開 ④在宅でターミナルを迎える高齢者と家族の生活支援	講義・演習		
19	事例で考える利用者の生活と介護過程の展開 ⑤ 片麻痺のある高齢者の夢の実現に向けた支援	講義・演習		
20	事例で考える利用者の生活と介護過程の展開 ⑤片麻痺のある高齢者の夢の実現に向けた支援	講義・演習		
21	事例で考える利用者の生活と介護過程の展開 ⑤ 片麻痺のある高齢者の夢の実現に向けた支援	講義・演習		
22	事例で考える利用者の生活と介護過程の展開 ⑤片麻痺のある高齢者の夢の実現に向けた支援	講義・演習		
23	事例で考える利用者の生活と介護過程の展開 ⑥ 災害により生活環境が大きく変化した高齢者の支援	講義・演習		
24	事例で考える利用者の生活と介護過程の展開 ⑥災害により生活環境が大きく変化した高齢者の支援	講義・演習		
25	事例で考える利用者の生活と介護過程の展開 ⑥災害により生活環境が大きく変化した高齢者の支援	講義・演習		
26	事例で考える利用者の生活と介護過程の展開 ⑥災害により生活環境が大きく変化した高齢者の支援	講義・演習		
27	事例で考える利用者の生活と介護過程の展開			
28	各事例ごとにGW後の発表会			
29				
30	筆記テスト			

[使用テキスト・参考文献] 介護福祉士養成講座９ 介護過程	[評価方法] 筆記試験　８０％ 授業態度　１０％ 出席状況　１０％

授　業　概　要

科目名	授業方法	授業担当者	実務経験
介護総合演習Ⅰ	講義　・　演習	橋本まゆみ・森本京介	無

授業の回数	時間数(単位数)	配当学年・時期	必修・選択
30回	60時間（2）	1学年・前期	必　　修

[授業の目的]

介護実践に必要な知識と技術の統合を行うとともに、介護観を形成し、専門職としての態度を養う学習とする

[授業の概要]

1年次での介護実習参加にあたり実習前には必要な知識・技術を再確認し実習後には学びの振り返りとともに、それぞれの場での学びを統合する時間とする

[到達目標]

1．介護福祉士に求められる役割と機能を理解し専門職としての態度を養う
2．介護を実践する対象、場によらず、様々な場面に必要とされる介護の基礎的知識・技術を習得する
3．本人、家族等との関係性の構築やチームケアを実践するための、コミュニケーションの基礎的知識・技術を習得する
4．対象となる人の能力を引き出し、本人主体の生活を地域で継続するための介護過程を展開する能力を養う
5．介護実践における安全を管理するための基礎的知識・技術を習得する
6．各領域で学んだ知識と技術を統合し、介護実践に必要な観察力・判断力及び思考力を養う

[授業計画]

回	授業内容	方　法	備考
1	介護総合演習で何を学ぶのか・基礎実習前の準備	講　義	
2	介護総合実習の目的・種類・実習前後の学びの活かし方	講　義	
3	介護実習中の学習内容と方法・カンファレンスとは	講　義	
4	各実習施設について学ぶ	演　習	
5	実習後の学習内容と方法	講　義	
6	各実習施設での学びについてグループにてまとめを行う	演　習	
7	基礎実習前の準備　　各施設について　訪問介護・通所介護	演　習	
8	基礎実習前の準備　　各施設について　通所リハ	演　習	
9	基礎実習前の準備　　各施設について　小規模対機能	演　習	
10	基礎実習前の準備　　各施設について　特別養護老人ホーム	演　習	
11	基礎実習前の準備　　各施設について　介護老人保健施設	演　習	
12	基礎実習前の準備　　各施設について　障害者支援施設	演　習	
13	基礎実習前の準備　　実習させて頂く施設について調べる	演　習	
14	基礎実習前の準備　　実習させて頂く施設について調べる	演　習	
15	基礎実習後の振り返り	演　習	
16	基礎実習後の振り返り	演　習	
17	基礎実習後の振り返り	演　習	
18	基礎実習後の振り返り	演　習	
19	基礎実習後の振り返り	演　習	
20	基礎実習後の振り返り　次の実習に向けた課題を見出す	演　習	
21	参加型実習の準備	演　習	
22	参加型実習の準備	演　習	

23	参加型実習の準備	演　習		
24	参加型実習の準備	演　習		
25	参加型実習の準備	演　習		
26	参加型実習の準備	演　習		
27	参加型実習の準備	演　習		
28	参加型実習の準備	演　習		
29	参加型実習の振り返り	演　習		
30	参加型実習の振り返り	演　習		

[使用テキスト・参考文献] 介護福祉士養成講座１０ 介護総合演習・介護実習	[評価方法] (試験やレポートの評価基準など) 課題レポート　５０％ 授業態度　４０％ 出席状況　１０％

授　業　概　要

科目名	授業方法	授業担当者	実務経験
介護総合演習Ⅱ	演習	橋本まゆみ・森本京介	無

授業の回数	時間数(単位数)	配当学年・時期	必修・選択
30回	60時間（2）	2学年・前期	必　修

[授業の目的]

介護実践に必要な知識と技術の統合を行うとともに、介護観を形成し、専門職としての態度を養う学習とする

[授業の概要]

2年次での介護実習参加にあたり実習前には必要な知識・技術を再確認し実習後には学びの振り返りとともに、それぞれの場での学びを統合する時間とする

[到達目標]

1．介護福祉士に求められる役割と機能を理解し専門職としての態度を養う
2．介護を実践する対象、場によらず、様々な場面に必要とされる介護の基礎的知識・技術を習得する
3．本人、家族等との関係性の構築やチームケアを実践するための、コミュニケーションの基礎的知識・技術を習得する
4．対象となる人の能力を引き出し、本人主体の生活を地域で継続するための介護過程を展開する能力を養う
5．介護実践における安全を管理するための基礎的知識・技術を習得する
6．各領域で学んだ知識と技術を統合し、介護実践に必要な観察力・判断力及び思考力を養う

[授業計画]

回	授業内容	方法	備考
1	参加型実習の準備	演　習	
2	参加型実習の準備	演　習	
3	参加型実習の準備	演　習	
4	参加型実習の準備	演　習	
5	参加型実習の準備	演　習	
6	参加型実習の準備	演　習	
7	参加型実習の準備	演　習	
8	参加型実習の準備	演　習	
9	参加型実習の準備	演　習	
10	参加型実習の準備	演　習	
11	参加型実習の振り返り	演　習	
12	参加型実習の振り返り	演　習	
13	参加型実習の振り返り	演　習	
14	参加型実習の振り返り	演　習	
15	参加型実習の振り返り	演　習	
16	参加型実習の振り返り	演　習	
17	統合実習前の準備	演　習	
18	統合実習前の準備	演　習	
19	統合実習前の準備	演　習	
20	統合実習前の準備	演　習	
21	統合実習前の準備	演　習	

22	統合実習前の準備	演　習	
23	統合実習前の準備	演　習	
24	統合実習前の準備	演　習	
25	統合実習前の準備	演　習	
26	統合実習前の準備	演　習	
27	統合実習後の振り返りまとめ	演　習	
28	統合実習後の振り返りまとめ	演　習	
29	実習総まとめ発表	演　習	
30			

[使用テキスト・参考文献] 介護福祉士養成講座１０ 介護総合演習・介護実習	[評価方法] （試験やレポートの評価基準など） 課題レポート　５０％ 授業態度　４０％ 出席状況　１０％

授　業　概　要

科目名	授業方法	実習担当者	実務経験
介護実習Ⅰ―1（基礎①）	実　　習	全教員：責任者山下美登世	一部有

実習日数	時間数(単位数)	配当学年・時期	必修・選択
6日間	45時間（1）	1学年・前期	必　　修

[授業の目的]

地域におけるさまざまな場において個々の生活リズムや個性を理解するという観点から個別ケアを理解するために、利用者とのコミュニケーションを実践し、人間関係の構築方法を学び、地域における生活支援の実践や施設や機関の役割について、多職種協働の実践について学ぶ

[授業の概要]

介護実習Ⅰ―1では、個別性を理解し、利用者家族とのコミュニケーションの実践、介護技術の確認、多職種協働や関係機関との連携を通じてチームの一員としての介護福祉士の役割を理解する。

[到達目標]

（1）講義・演習など学内で学んだ知識に基づいて利用者との人間関係を構築し、利用者が求めている介護の需要に関する理解力や判断力を養うことができる

・介護が必要な利用者とはどういった方たちなのかを知る
・利用者の生活の現場を見る事で介護の実際について知る
・介護福祉士の役割について理解する
・施設における介護士と他の職種との連携について知る
・介護福祉士のコミュニケーション技術について学び実践につなげることができる

<実習概要>

1日目：各施設オリエンテーションを受ける
①目標発表
② 施設の概要・暮らしの場が理解できる
③施設で働く職種
④入所者（利用者）について
⑤職員のシャドーイングからコミュニケーションの大切さを知る
⑥目標に対する評価報告

2日目～5日目
①目標発表
③ 施設職員の関わり方を学ぶ
④ 職員の関わり方を参考に許可のある利用者と関わらせていただく（コミュニケーション）
⑤ 利用者の一日の過ごし方について学ぶ
⑥ グループワークの時間で疑問や情報の共有を行う
⑦ 目標に対する評価報告

6日目：最終日まとめの会
①目標発表
②施設職員の関わり方を学ぶ
③職員の関わり方を参考に許可のある利用者と関わらせていただく（コミュニケーション）
④利用者の一日の過ごし方について学ぶ
⑥ まとめの会を実施し6日間の振り返りを行い、目標に対する評価報告を行う

[使用テキスト・参考文献]	[評価方法]
介護福祉士養成講座１０ 介護実習	介護実習指導要綱に準じる

授　業　概　要

科目名	授業方法	実習担当者	実務経験
介護実習Ⅰ―2（基礎②）	実　　習	全教員：責任者 山下美登世	一部有

実習日数	時間数(単位数)	配当学年・時期	必修・選択
12日間	90時間（2）	1学年・後期	必　修

[授業の目的]

地域におけるさまざまな場において個々の生活リズムや個性を理解するという観点から個別ケアを理解するために、利用者とのコミュニケーションを実践し、人間関係の構築方法を学び、地域における施設や機関の役割についてや、多職種連携の場について実践を通して学んだ基礎①を基盤に介護福祉士の実際の業務について理解し、監視下での実施につなげることができる

[授業の概要]

介護実習では、個別性を理解し、利用者家族とのコミュニケーションの実践、介護技術の確認、多職種協働や関係機関との連携を通じてチームの一員としての介護福祉士の役割を理解する。

[到達目標]

①講義・演習など学内で学んだ知識に基づいて利用者との人間関係を構築し、利用者が求めている介護の需要に関する理解力や判断力を養うことができる

② 日常生活援助に関する介護技術能力を深めると同時に各種の介護を助ける住設備機器や福祉用具の知識と活用方法を養うことができる

・日常生活援助についての実際にふれ、利用者にそった援助技術について考えることができる

・介護実践の優先順位や、技術の根拠について考えることが出来る

基本的な介護技術を実践しながら、実習Ⅱの介護過程の展開につなげる

＜実習の概要＞

1．　利用者の状態像を観察することができる

2．　利用者の生活の課題を理解することができる

3．　安全性と快適さに配慮した介護技術を実践することができる

4．　対人関係を意識したコミュニケーションをとることができる

高齢者や障害のある人々に介護サービスを提供するときに、もっとも具体的で効果的効果的な手段の１つとなる介護技術の展開を目的とする。それぞれの暮らしの場で1人ひとりの心身の状況に応じた介護技術を展開することは介護福祉士としてとても大切なポイントとなる。単なる身体介護にとどまらず利用者の生活を支援するための介護技術の展開を行い、次の実習へとつなげる

毎日実施　目標発表・グループワーク・評価報告・2日目からは前日に記録した記録物の提出及び出席簿の提出を行いサインまたは捺印していただく

1日目　オリエンテーション（施設・利用者・職員）

担当利用者の紹介をうけ、その方の日常に触れつつ職員の動き方、コミュニケーションスキルを学ぶ

2日目～11日目

担当利用者の日常に触れつつ職員の動き方、コミュニケーションスキルを学び

介助可能な技術に関しては臨床指導者に相談し許可を得てから実施する。

(介助内容により監視下での実施とする)

12日目　最終日は臨床と時間調整を行いまとめの会を実施し参加していただく 最終日については記録物を各施設で仕上げ提出してから終了とする	
[使用テキスト・参考文献] 介護福祉士養成講座１０ 介護実習	[評価方法] 介護実習指導要綱に準じる

授　業　概　要

科目名	授業方法	実習担当者	実務経験
介護実習Ⅰ―3（参加①）	実　　習	全教員：責任者 中川　香居	一部有

実習日数	時間数(単位数)	配当学年・時期	必修・選択
12日間	90時間（2）	1学年・後期	必　　修

[授業の目的]

地域におけるさまざまな場において個々の生活リズムや個性を理解するという観点から個別ケアを理解するために、利用者とのコミュニケーションを実践し、人間関係の構築方法を学び、地域における施設や機関の役割についてや、多職種連携の場と実践を通して学んだ基礎①と基礎②を基盤に介護福祉士の実際の業務について自身で考え対象者を理解し、介護実践の実施につなげることができる

[授業の概要]

介護実習では、個別性を理解し、利用者家族とのコミュニケーションの実践、介護技術の確認、多職種協働や関係機関との連携を通じてチームの一員としての介護福祉士の役割を理解する。また、自身で介護技術の実践が行えるよう利用者について観察し、考察し、実践につなげることができる

[到達目標]

①講義・演習など学内で学んだ知識に基づいて利用者との人間関係を構築し、利用者が求めている介護の需要に関する理解力や判断力を養うことができる

②日常生活援助に関する介護技術能力を深めると同時に各種の介護を助ける住設備機器や福祉用具の知識と活用方法を養うことができる

③ 実習指導者の指導を受けながら報告・連絡・相談、記録の仕方について学び、チームの一員として介護を遂行する能力を養うことができる

地域で生活するために必要な支援体制を理解する

＜実習概要＞

1．　利用者を取り巻く家族や近隣との関係に注目できる

2．　利用者を取り巻く社会の支援体制が理解できる

3．　利用者に対して必要な介護技術について観察し、考察し、実践につなげることができる

利用者だけでなく、その家族や近隣、地域にまで視野を広げたうえで利用者が地域で暮らしていくための支援システムの理解を想定した実習。

目の前にいる利用者は決して1人で生きているわけではなく、さまざまな介護サービスを利用しながら生活を送っている。この実習を通じて生活支援の幅の広さを認識し、利用者が地域で暮らすための支援のあり方を模索する姿勢を身につけさせていく。

毎日実施　目標発表・グループワーク・評価報告・2日目からは前日に記録した記録物の提出及び出席簿の提出を行いサインまたは捺印していただく

1日目　オリエンテーション（施設・利用者・職員）
担当利用者の紹介をうけ、その方の日常に触れつつ職員の動き方、コミュニケーションスキルを学ぶ

2日目～11日目
担当利用者の日常に触れつつ職員の動き方、コミュニケーションスキルを学び介助可能な技術に関しては臨床指導者に相談し許可を得てから実施する。
(介助内容により監視下での実施とする)

12日目　最終日は臨床と時間調整を行いまとめの会を実施し参加していただく

最終日については記録物を各施設で仕上げ提出してから終了とする	
[使用テキスト・参考文献] 介護福祉士養成講座１０ 介護実習	[評価方法] 介護実習指導要綱に準じる

授　業　概　要

科目名	授業方法	実習担当者	実務経験
介護実習Ⅱ―１（参加②）	実　　習	全教員：責任者 中川　香居	一部有

実習日数	時間数(単位数)	配当学年・時期	必修・選択
12日間	90時間（２）	2学年・前期	必　　修

[授業の目的]

地域におけるさまざまな場において個々の生活リズムや個性を理解するという観点から個別ケアを理解するために、利用者とのコミュニケーションを実践し、人間関係の構築方法を学び、地域における施設や機関の役割についてや、多職種連携の場を実践を通して学んだ基礎実習と参加型実習①をふまえ、介護過程の展開を実践することができる

[授業の概要]

個別ケア（介護過程）を行うために、個々の生活リズムや個性を理解し、利用者のニーズに沿って利用者ごとの介護計画の作成、実施、実施後の評価、計画修正といった一連の介護過程を展開し他科目で学習した知識や技術を総合して、具体的な介護サービスの提供の基本となる実践力を身につける

[到達目標]

① 講義・演習など学内で学んだ知識に基づいて利用者との人間関係を構築し、利用者が求めている介護の需要に関する理解力や判断力を養うことができる

②日常生活援助に関する介護技術能力を深めると同時に各種の介護を助ける住設備機器や福祉用具の知識と活用方法を養うことができる

③実習指導者の指導を受けながら報告・連絡・相談、記録の仕方について学び、チームの一員として介護を遂行する能力を養うことができる

④ 施設介護実習では、施設の運営や地域における生活支援の実践、さらに要介護者・障害者等に対するサービス提供全般において多職種連携を通じて介護福祉士としての職務について理解を深めることが出来る

⑤ 訪問介護実習では、要介護者・要支援者の自宅を訪問し、身体面・家事面における生活援助などについて理解を深めることが出来る

統合実習につながる内容とする

<実習概要>

毎日実施　目標発表・グループワーク・評価報告・2日目からは前日に記録した記録物の提出及び出席簿の提出を行いサインまたは捺印していただく

介護過程の展開を行う

1日目　オリエンテーション（施設・利用者・職員）

担当利用者の紹介をうけ、その方の日常に触れつつ職員の動き方、コミュニケーションスキルを学ぶ

2日目～11日目

担当利用者の日常に触れつつ職員の動き方、コミュニケーションスキルを学び介助可能な技術に関しては臨床指導者に相談し許可を得てから実施する。

(介助内容により監視下での実施とする)

12日目　最終日は臨床と時間調整を行いまとめの会を実施し参加していただく

最終日については記録物を各施設で仕上げ提出してから終了とする

[使用テキスト・参考文献]	[評価方法]
介護福祉士養成講座１０ 介護実習	介護実習指導要綱に準じる

授　業　概　要

科目名	授業方法	実習担当者	実務経験
介護実習Ⅱ―２（統合）	実　　習	全教員：責任者 西本房乃	一部有

実習日数	時間数(単位数)	配当学年・時期	必修・選択
18日	135時間（３）	2学年・後期	必　　修

[授業の目的]

本人の望む生活の実現に向けて、多職種との協働の中で介護過程を実践する能力を修得する。更にサービス担当者会議やカンファレンス等を通して多職種連携やチームケアを体験的に学ぶ学習とする。主体的に生活支援技術を実施する。受け持ち利用者の介護計画を立案し、計画に沿った実施を行い、実施後評価ができる

[授業の概要]

1人の担当利用者を受け持たせていただき、個別援助計画を立案し、実施、評価を行う。個別援助計画実施前には施設内でのカンファレンスを実施し、実習生自身が立案した個別援助計画を説明する機会をもたせていただく。このように1人の利用者を通して生活を支える援助を一連の流れとして学び、多職種がどのように関わりを持ち、支援しているのか知識や技術を統合し、具体的な介護サービスの提供の基本となる実践力習得できるようを総合的に学ぶ。

[到達目標]

今までの実習を基盤に、利用者に添った介護技術の実践を行い、さらに実施後の評価を行う事で、より良い介護実践につなげていけるよう学びを深める

<実習概要>

毎日実施　目標発表・グループワーク・評価報告・2日目からは前日に記録した記録物の提出及び出席簿の提出を行いサインまたは捺印していただく
介護過程の展開を行う

1日目　オリエンテーション（施設・利用者・職員）
担当利用者の紹介をうけ、その方の日常に触れつつ職員の動き方、コミュニケーションスキルを学ぶ

2日目～17日目
担当利用者の日常に触れつつ職員の動き方、コミュニケーションスキルを学び介助可能な技術に関しては臨床指導者に相談し許可を得てから実施する。
(介助内容により監視下での実施とする)
介護過程の展開を行い、実施後の評価をカンファレンスとして実施

１８日目　最終日は臨床と時間調整を行いまとめの会を実施し参加していただく
最終日については記録物を各施設で仕上げ提出してから終了とする

[使用テキスト・参考文献]	[評価方法]
介護福祉士養成講座１０ 介護実習	介護実習指導要綱に準じる

授　業　概　要

科目名	授業方法	授業担当者	実務経験
発達と老化の理解Ⅰ	講義　・　演習	橋本　まゆみ	無

授業の回数	時間数(単位数)	配当学年・時期	必修・選択
15回	30時間（1）	1学年・後期	必　修

[授業の目的]

人間の成長と発達の過程における、身体的・心理的・社会的変化及び老化が生活に及ぼす影響を理解し、ライフサイクルの特徴に応じた生活を支援するために必要な基礎的な知識を習得する学習とする

[授業の概要]・

発達と老化の理解では、介護を必要とする人の理解を深めるため、人間の成長と発達の観点から人の一生について理解する。ライフサイクル各期（乳幼児期・学童期・思春期・青年期・成人期・老年期）における身体的・心理的・社会的特徴と発達をふまえ、各段階に応じた生活支援のあり方を学ぶ。また、発達の観点から老化を理解し老化に伴う身体的・心理的・社会的な変化や疾病と生活への影響など、生活を支援するための基礎的な知識を学ぶ

[到達目標]

人間の成長と発達の基本的な考え方をふまえ、ライフサイクル各期（乳幼児期・学童期・思春期・青年期・成人期・老年期）における身体的・心理的・社会的特徴と発達課題及び特徴的な疾病について理解できるようにする

[授業計画]

回	授業内容	方　法	備　考
1	人間の成長と発達の基礎的知識　成長発達の考え方	講　義	
2	人間の成長と発達の基礎的知識　成長発達の原則・法則	講　義	
3	人間の成長と発達の基礎的知識　成長発達に影響する因子	講　義	
4	人間の発達段階と発達課題　　発達理論	講　義	
5	人間の発達段階と発達課題　　発達段階と課題	講　義	
6	人間の発達段階と発達課題　　身体的機能の成長と発達	講　義	
7	人間の発達段階と発達課題　　心理的機能の発達	講　義	
8	人間の発達段階と発達課題　　社会的機能の発達	講　義	
9	・エリクソン発達段階・運動機能の発達・ピアジェンイン	演　習	
10	チ発達理論・愛着・などGWを実施		
11	老年期の特徴と発達課題	講　義	
12	3章のまとめを行う	演　習	
13	1～3章の学びを発表する	演　習	
14			
15	筆記テスト		

[使用テキスト・参考文献]

介護福祉士養成講座１２
発達と老化の理解

[評価方法]

筆記テスト　８０％
授業態度　　１０％
出席状況　　１０％

授　業　概　要

科目名	授業方法	授業担当者	実務経験
発達と老化の理解Ⅱ	講義　・　演習	橋本　まゆみ	無

授業の回数	時間数(単位数)	配当学年・時期	必修・選択
15回	30時間（1）	2学年・前期	必　　修

[授業の目的]

人間の成長と発達の過程における、身体的・心理的・社会的変化及び老化が生活に及ぼす影響を理解し、ライフサイクルの特徴に応じた生活を支援するために必要な基礎的な知識を習得する学習とする

[授業の概要]・

発達と老化の理解では、介護を必要とする人の理解を深めるため、人間の成長と発達の観点から人の一生について理解する。ライフサイクル各期（乳幼児期・学童期・思春期・青年期・成人期・老年期）における身体的・心理的・社会的特徴と発達をふまえ、各段階に応じた生活支援のあり方を学ぶ。また、発達の観点から老化を理解し老化に伴う身体的・心理的・社会的な変化や疾病と生活への影響など、生活を支援するための基礎的な知識を学ぶ

[到達目標]

老化に伴う身体的・心理的・社会的な変化や心と身体の変化、高齢者に多くみられる疾病と日常生活への影響、健康の維持・増進を含めた生活の支援について理解できるようにする

[授業計画]

回	授業内容	方　法	備　考
1	老化にともなうこころとからだの変化と生活　身体面	講　義	
2	老化にともなうこころとからだの変化と生活　心理面	講　義	
3	老化にともなうこころとからだの変化と生活　社会面	講　義	
4	4章についてのグループワークを実施	演　習	
5	高齢者と健康　健康長寿に向けての健康	講　義	
6	高齢者に多い症状・疾患の特徴	講　義	
7	サクセスフルエイジングについて	演　習	
8	保健医療職との連携	講　義	
9	高齢者に多い疾患・症状と生活上の留意点①	演　習	
10	高齢者に多い疾患・症状と生活上の留意点②	演　習	
11	高齢者に多い疾患・症状と生活上の留意点③	演　習	
12	高齢者に多い疾患・症状と生活上の留意点④	演　習	
13	4・5章についてまとめの発表	演習	
14			
15	筆記テスト		

[使用テキスト・参考文献]

介護福祉士養成講座１２
発達と老化の理解

[評価方法]

筆記テスト　８０％
授業態度　　１０％
出席状況　　１０％

授　業　概　要

科目名	授業方法	授業担当者	実務経験
認知症の理解Ⅰ	講義　・　演習	山下　美登世	無

授業の回数	時間数(単位数)	配当学年・時期	必修・選択
15回	30時間（1）	1学年・後期	必　　修

[授業の目的]

認知症の人の心理や身体機能、社会的側面に関する基礎的な知識を習得するとともに認知症の人を中心に据え認知症ケアについて理解するための基礎的な知識を習得する学習とする

[授業の概要]

認知症の理解Ⅰでは、認知症を取り巻く状況、認知症ケアの歴史や理念などについて学ぶ。また、認知症の原因となる主な疾患や症状の特徴や基礎を学び、それらによって引き起こされるこころと身体の変化や日常生活への影響について理解する

[到達目標]

（1）認知症ケアの歴史や理念を含む、認知症を取り巻く社会的環境について理解できるようにする

（2）　医学的・心理的側面から、認知症の原因となる疾患及び段階に応じた心身の変化や心理症状を理解し、生活支援を行うための根拠となる知識を理解できるようにする

（3）　認知症の人の生活および家族や社会との関わりへの影響を理解し、その人の特性を踏まえたアセスメントを行い、本人主体の理念に基づいた認知症ケアの実践につなぐことができるようにする

[授業計画]

回	授業内容	方　法	備　考
1	認知症の基礎的理解　認知症とは何か	講　義	
2	認知症の基礎的理解　脳のしくみ①	講　義	
3	認知症の基礎的理解　脳のしくみ②	講　義	
4	認知症の基礎的理解　認知症の人の心理	講　義	
5	1章について演習を行い、まとめを行う	演　習	
6	中核症状の理解・生活障害の理解	講　義	
7	BPSDの理解・認知症診断と重症度	講　義	
8	認知症原因疾患と症状・生活障害	講　義	
9	認知症の治療薬・予防	講　義	
10	2章について演習を行い、まとめを行う	演　習	
11	認知症の人を取り巻く状況・ケアの理念と視点	講　義	
12	認知症当事者の視点からみえるもの	講　義	
13	3章について演習を行い、まとめを行う	演　習	
14	1・2・3章について発表	演　習	
15	筆記テスト		

[使用テキスト・参考文献]

介護福祉士養成講座１３
認知症の理解

[評価方法]

筆記テスト　８０％
授業態度　１０％
出席状況　１０％

授　業　概　要

科目名	授業方法	授業担当者	実務経験
認知症の理解Ⅱ	講義　・　演習	山下　美登世	無

授業の回数	時間数(単位数)	配当学年・時期	必修・選択
15回	30時間（1）	2学年・前期	必　　修

[授業の目的]

認知症の人の心理や身体機能、社会的側面に関する基礎的な知識を習得するとともに認知症の本人や家族、地域の力を活用した認知症ケアについて理解するための基礎的な知識を習得する学習とする

[授業の概要]

認知症の理解Ⅱでは、利用者個々の特性を踏まえた適切なケアを提供するための知識や支援方法、地域で生活する認知症のある人とその家族の支援体制の在り方、多職種連携・協働の在り方について学ぶ

[到達目標]

（1）認知症の人の生活を地域で支えるサポート体制や、多職種連携・協働による支援について理解できる

（2）認知症の人を支える家族の課題について理解し、家族の受容段階や介護力に応じた支援につなぐことができる

[授業計画]

回	授業内容	方　法	備　考
1	認知症ケアの実際　パーソンセンタードケア アセスメントツール	講　義	
2	認知症の人とのコミュニケーション・ケアの実際	講　義	
3	さまざまなアプローチ法	講　義	
4	終末期医療と介護・環境作り	講　義	
5	4章についてまとめを行う	演　習	
6	介護者支援・家族への支援	講　義	
7	介護者支援・介護福祉職への支援	講　義	
8	5章についてまとめを行う	演　習	
9	認知症の人の地域生活支援①　地域包括ケアシステム	講　義	
10	認知症の人の地域生活支援②　多職種連携と協働	講　義	
11	認知症の人の地域生活支援③	講　義	
12	6章についてまとめを行う	演　習	
13	４・５・６章についてのまとめの発表	演　習	
14			
15	筆記テスト		

[使用テキスト・参考文献]

介護福祉士養成講座１３
認知症の理解

[評価方法]

筆記テスト　８０％
授業態度　　１０％
出席状況　　１０％

授　業　概　要

科目名	授業方法	授業担当者	実務経験
障害の理解Ⅰ	講義　・　演習	中川　香居	無

授業の回数	時間数(単位数)	配当学年・時期	必修・選択
15回	30時間（1）	1学年・後期	必　　修

[授業の目的]

障害のある人の心理や身体機能、社会的側面に関する基礎的な知識を習得するとともに、傷害のある人の地域での生活を理解し、本人のみならず家族や地域を含めた周囲の環境への支援を理解するための基礎的な知識を習得する

[授業の概要]

障害に理解Ⅰでは、障害の基礎的理解として、障害の概念や基本的理念、さらに障害の医学的・心理的側面の基礎的な知識を学ぶ

[到達目標]

（1）障害のある人の生活を支援するという観点から、障害の概念や、障害の特性に応じた制度の基礎的な知識を理解できるようにする

（2）医学的・心理的側面から、障害による心身への影響や心理的な変化を理解できるようにする

（3）障害のある人のライフステージや障害の特性を踏まえ、機能の変化が生活に及ぼす影響を理解し、QOLを高める支援につなぐことができるようにする

[授業計画]

回	授業内容	方　法	備　考
1	障害の概念①	講　義	
2	障害の概念②	講　義	
3	障害者福祉の基本理念	講　義	
4	障害者福祉に関連する制度	講　義	
5	障害者福祉制度と介護保険制度	講　義	
6	1章のまとめ　ICFの考え方など	演　習	
7	障害のある人の心理	講　義	
8	肢体不自由（運動機能障害）	講　義	
9	視覚障害	講　義	
10	聴覚・言語障害	講　義	
11	重複障害	講　義	
12	内部障害	講　義	
13	重症心身障害	講　義	
14	手書き文字による意思疎通	演　習	
15	筆記テスト		

[使用テキスト・参考文献]

介護福祉士養成講座１４
障害の理解

[評価方法]

筆記テスト　８０％
授業態度　　１０％
出席状況　　１０％

授　業　概　要

科目名	授業方法	授業担当者	実務経験
障害の理解Ⅱ	講義　・　演習	中川　香居	無

授業の回数	時間数(単位数)	配当学年・時期	必修・選択
15回	30時間（1）	2学年・後期	必　　修

[授業の目的]

障害のある人の心理や身体機能、社会的側面に関する基礎的な知識を習得するとともに、傷害のある人の地域での生活を理解し、本人のみならず家族や地域を含めた周囲の環境への支援を理解するための基礎的な知識を習得する

[授業の概要]

障害に理解Ⅱでは、障害のある人のライフステージや特性に応じた支援、多職種連携と協働、家族への支援について学ぶ

[到達目標]

（1）　障害のある人のライフステージや障害の特性を踏まえ、機能の変化が生活に及ぼす影響を理解し、QOLを高める支援につなぐことができるようにする

（2）　障害のある人の生活を地域で支えるためのサポート体制や、多職種連携・協働による支援について理解できるようにする

（3）　障害のある人を支える家族の課題について理解し、家族の受容段階や介護力い応じた支援につなぐことが出来るようにする

[授業計画]

回	授業内容	方　法	備　考
1	知的障害	講　義	
2	精神障害	講　義	
3	高次脳機能障害	講　義	
4	発達障害	講　義	
5	難病	講　義	
6	3章　知的障害のある人の自立支援	演　習	
7	連携と協働　地域サポート体制	講　義	
8	連携と協働　チームアプローチ	講　義	
9	4章　自分が在住する地域の協議会を知る	演　習	
10	家族への支援とは	講　義	
11	家族の介護力の評価と介護負担の軽減	講　義	
12	5章　障害のある人の家族を支えるために必要な事	演　習	
13	3・4・5章　まとめの発表	演　習	
14		演　習	
15	筆記テスト		

[使用テキスト・参考文献]

介護福祉士養成講座１４

障害の理解

[評価方法]

筆記テスト　８０％

授業態度　１０％

出席状況　１０％

授　業　概　要

科目名	授業方法	授業担当者	実務経験
こころとからだのしくみⅠ	講　　義	橋本　まゆみ	無

授業の回数	時間数(単位数)	配当学年・時期	必修・選択
15回	30時間（1）	1学年・前期	必　　修

[授業の目的]

介護を必要とする人の生活支援を行うため、介護実践の根拠となる人間の心理、人体の構造や機能を理解する学習とする

[授業の概要]

こころとからだのしくみの基礎として、介護技術の根拠となる人体の構造や機能について理解するための学習とする

[到達目標]

（1）人体の基本的構造及び機能について述べる事ができる

（2）　生命の維持・恒常性について学ぶことが出来る

（3）　こころを働かせる脳の仕組みについて知り、介護における留意点や心理的側面への配慮について説明ができる

[授業計画]

回	授業内容	方法	備考
1	健康の定義・健康とはどういうことか	講　義	
2	マズローの欲求段階説、自己実現と尊厳	講　義	
3	こころのしくみ　認知・学習・記憶・思考のしくみ	講　義	
4	こころのしくみ　感情・動機・意欲のしくみと適応機制	講　義	
5	からだのしくみ　細胞構造と身体各部の名称	講　義	
6	脳の構造と神経系	講　義	
7	眼・耳・鼻・舌・皮膚の構造と内臓の配置	講　義	
8	肺・気管・心臓・血管系の構造と機能	講　義	
9	消化器・泌尿器の構造と機能	講　義	
10	骨・関節・筋肉の構造、名称、機能と神経系のはたらき	講　義	
11	生殖器、内分泌器官の構造と機能	講　義	
12	血液・体液・リンパ液と恒常性	講　義	
13	生命維持と恒常性のしくみ	講　義	
14	介護福祉職における薬の知識	講　義	
15	筆記テスト		

[使用テキスト・参考文献]

介護福祉士養成講座１１

こころとからだのしくみ

[評価方法]

筆記テスト　８０％

授業態度　　１０％

出席状況　　１０％

授　業　概　要

科目名	授業方法	授業担当者	実務経験
こころとからだのしくみⅡ	講義　・　演習	橋本　まゆみ	無

授業の回数	時間数(単位数)	配当学年・時期	必修・選択
15回	30時間（1）	1学年・後期	必　　修

[授業の目的]

介護を必要とする人の生活支援を行うため、介護実践の根拠となる人間の心理、人体の構造や機能を理解する学習とする

[授業の概要]

人間が社会生活を営む上で基礎となる移動動作には起き上がる、座る、立つ、歩くがある。介護技術の根拠となる人体の構造や機能、利用者のさまざまな状態に応じた安全面への配慮について理解し学習する。また、身支度や食事に関連したこころとからだのしくみについて学ぶ。食事では栄養を摂取し人間が清明を維持し活動し成長をするために必要な栄養素を摂る行為で利用者が安全な食事をするための留意点を学び実際の介護に役立てられる学習とする

[到達目標]

（1）人の活動・移動に関する基礎知識について述べる事ができる
（2）機能低下や障害が及ぼす活動・移動の影響について説明できる
（3）食事に関連した基礎知識について述べる事ができる
（4）こころやからだの機能低下や障害が食事に及ぼす影響について説明できる

[授業計画]

回	授業内容	方　法	備考
1	活動・移動に関連した基礎知識　基本的な姿勢	講　義	
2	活動・移動に関連した基礎知識　ボディメカニクス	講　義	
3	心身の機能低下が移動に及ぼす影響・変化の気づきと対応	講　義	
4	3章演習　安定した姿勢・利用者の変化の気づきと対応	演　習	
5			
6	身支度のしくみ	講　義	
7	心身の機能低下が身支度に及ぼす影響・変化の気づきと対応	講　義	
8	4章演習　口腔の観察・口臭の予防と対応	演　習	
9			
10	食事のしくみ	講　義	
11	心身の機能低下が食事に及ぼす影響・変化の気づきと対応	講　義	
12	5章演習　摂食嚥下の5期モデル	演　習	
13	３・４・５章まとめの発表	演　習	
14			
15	筆記テスト		

[使用テキスト・参考文献]

介護福祉士養成講座１１
こころとからだのしくみ

[評価方法]

筆記テスト　８０％
授業態度　　１０％
出席状況　　１０％

授　業　概　要

科目名	授業方法	授業担当者	実務経験
こころとからだのしくみⅢ	講義　・　演習	中川　香居	無

授業の回数	時間数(単位数)	配当学年・時期	必修・選択
15回	30時間（1）	2学年・前期	必　　修

[授業の目的]

介護を必要とする人の生活支援を行うため、介護実践の根拠となる人間の心理、人体の構造や機能を理解する学習とする

[授業の概要]

入浴や身体の清潔を保持すること、排泄についての基礎知識を身につけ、それらに関連したこころとからだのしくみを理解し、介護技術を安全面に配慮しながら根拠を用いて実践できるための学習の場とする

[到達目標]

（1）機能低下が及ぼす清潔・整容行動への影響について学ぶことが出来る
（2）排泄に関連したこころとからだの基礎知識が身につき説明することができる
（3）心身機能の低下・障害が排泄に及ぼす影響について学習し介護に活かす方法を考えることができる

[授業計画]

回	授業内容	方法	備考
1	入浴・清潔保持のしくみ・意義目的	講　義	
2	人間を守る皮膚のしくみ（頭髪含む）機能・構造	講　義	
3	心身の機能低下が入浴・清潔保持に及ぼす影響・変化の気づきと対応	講　義	
4	6章演習　入浴の効果・陰部肛門の清潔・皮膚の変化に合わせた入浴・清潔保持の留意点・清潔保持の際の注意点と対応	演　習	
5			
6			
7			
8	排泄のしくみ	講　義	
9	心身の機能低下が排泄に及ぼす影響・変化の気づきと対応	講　義	
10	7章演習　排尿・排便のしくみ・利用者の状態から考える排泄の問題点とその原因・排尿障害の種類と特徴・便失禁の原因	演　習	
11			
12			
13	6・7章まとめの発表	演　習	
14			
15	筆記テスト		

[使用テキスト・参考文献]

介護福祉士養成講座１１
こころとからだのしくみ

[評価方法]

筆記テスト　８０％
授業態度　　１０％
出席状況　　１０％

授　業　概　要

科目名	授業方法	授業担当者	実務経験
こころとからだのしくみⅣ	講義　・　演習	山下　美登世	無

授業の回数	時間数(単位数)	配当学年・時期	必修・選択
15回	30時間（1）	2学年・後期	必　　修

[授業の目的]

介護を必要とする人の生活支援を行うため、介護実践の根拠となる人間の心理、人体の構造や機能を理解する学習とする

[授業の概要]

休息や睡眠が身体に及ぼす影響を学習し、基礎知識を身につけ介護技術を安全面に配慮しながら根拠を用いて実践できるための学習の場とする。また、人生の最終段階のケアに関連したこころとからだのしくみについても学ぶことが出来る

[到達目標]

（1）　機能低下が及ぼす休息・睡眠への影響について学ぶことが出来る
（2）　人生の最終段階に関連したこころとからだの基礎知識を身につけ説明する事ができる
（3）　「死」が及ぼす影響（本人・家族・スタッフ）について学習し介護に活かす方法を考えることができる

[授業計画]

回	授業内容	方法	備考
1	休息・睡眠のしくみ	講　義	
2	心身の機能低下が休息・睡眠に及ぼす影響・変化に気づくポイント	講　義	
3	8章演習　レム睡眠・ノンレム睡眠・快適にねむるための	演　習	
4	寝室の工夫・不眠症と睡眠障害		
5	人間の最終段階に関する「死」のとらえ方	講　義	
6	終末期とは・看取りに関わる人の価値観	講　義	
7	「死」に対するこころの理解・変化	講　義	
8	「死」に対するこころの理解・変化・受容・受容支援	講　義	
9	終末期から危篤状態、死後のからだ理解	講　義	
10	終末期における医療職との連携	講　義	
11	9章演習　キューブラーロスの死の受容のプロセス	演　習	
12	終末期のバイタルサインの変化		
13	8章・9章　まとめの発表	演　習	
14			
15	筆記テスト		

[使用テキスト・参考文献]

介護福祉士養成講座１１
こころとからだのしくみ

[評価方法]

筆記テスト　８０％
授業態度　　１０％
出席状況　　１０％

授　業　概　要

科目名	授業方法	授業担当者	実務経験
医療的ケアⅠ	講義　・　演習	森田　婦美子・山下　美登世 中川　香居	一部有

授業の回数	時間数(単位数)	配当学年・時期	必修・選択
30回	60時間（2）	２学年・前期	必　　修

[授業の目的]

医療的ケアの実施に関する制度や概要及び医療的ケアと関連付けた「個人の尊厳と自立」「医療的ケアの倫理上の留意点」「医療的ケアを実施するための感染予防」「安全管理体制」などについて基礎的知識を理解する

[授業の概要]

医療的ケアの実施をするうえで基礎となる考え方や関連する法律、チームの一員として介護福祉士が担う役割について概説する。また、喀痰吸引の知識・手順・留意点、及び関連するケアについて安全かつ確実な実施を行うために必要な学習をする。
喀痰吸引の演習はシミュレーターで口腔内・鼻腔内・気管カニューレ内部を5回以上演習する

[到達目標]

1．医療的ケアが必要な利用者・家族の気持ちが理解でき、介護者として望ましい姿勢が実行できる
2．医療的ケアにおける身体の解剖生理が理解でき、説明できる
3．医療的ケアにおける多職種との連携を理解し、その必要性が説明できる
4．感染予防について説明でき、実施できる
5．喀痰吸引を安全に実施できるように、必要物品の片付け、点検を行う事ができる
6．演習を通して、喀痰吸引の一連の手順を正確に、安全・適切に実施することができる

[授業計画]

回	授業内容	方　法	備考
1	医療的ケア実施の基礎　　医療的ケアとは	講　義	
2	医療的ケア実施の基礎　　個人の尊厳と自立	講　義	
3	医療的ケア実施の基礎　　保健医療に関する制度	講　義	
4	医療的ケア実施の基礎　　健康状態の把握	講　義	
5	高齢者および障害児・者の喀痰吸引概論 ①呼吸のしくみ	講　義	
6	高齢者および障害児・者の喀痰吸引概論 ②いつもと違う呼吸	講　義	
7	高齢者および障害児・者の喀痰吸引概論 ③人工呼吸と吸引	講　義	
8	高齢者および障害児・者の喀痰吸引概論 ④子どもの吸引、説明と同意	講　義	
9	高齢者および障害児・者の喀痰吸引概論 ⑤呼吸器系の感染予防	講　義	
１０	高齢者および障害児・者の喀痰吸引概論 ⑥ 危険の種類とその対応	講　義	
１１	高齢者および障害児・者の喀痰吸引概論 ⑦ 吸引に伴うケア⑧事故発生時の対応と対策	講　義	
１２	高齢者および障害児・者の喀痰吸引概論 ⑧事故発生時の対応と対策	講　義	
１３	感染防御策①	講　義	

１４	感染防御策②	講　義	
１５	器材・器具の取り扱いとしくみ①	講　義	
１６	器材・器具の取り扱いとしくみ②	講　義	
１７	医行為について・事故発生時の対応	講　義	
１８	喀痰吸引のケア実施① シミュレーターを用いた演習（口腔内）事例① ① 必要物品・手順の確認	演　習	
１９	喀痰吸引のケア実施② シミュレーターを用いた演習（口腔内）事例① 必要物品・手順の確認	演　習	
２０	喀痰吸引のケア実施③ シミュレーターを用いた演習（鼻腔内）事例② 必要物品・手順の確認	演　習	
２１	喀痰吸引のケア実施④ シミュレーターを用いた演習（鼻腔内）事例② 必要物品・手順の確認	演　習	
２２	喀痰吸引のケア実施⑤ シミュレーターを用いた演習（気管カニューレ内）事例③ 必要物品・手順の確認	演　習	
２３	喀痰吸引のケア実施⑥ シミュレーターを用いた演習（気管カニューレ内）事例③ 必要物品・手順の確認	演　習	
２４	喀痰吸引のケア実施⑦ ⑧ シミュレーターを用いた演習（口腔内）事例①	演　習	
２５	喀痰吸引のケア実施⑧ ⑨ シミュレーターを用いた演習（口腔内）事例①	演　習	
２６	喀痰吸引のケア実施⑨ ⑩ シミュレーターを用いた演習（鼻腔内）事例②	演　習	
２７	喀痰吸引のケア実施⑩ ⑪ シミュレーターを用いた演習（鼻腔内）事例②	演　習	
２８	喀痰吸引のケア実施⑪ シミュレーターを用いた演習（気管カニューレ内）事例③	演　習	
２９	喀痰吸引のケア実施⑫ シミュレーターを用いた演習（気管カニューレ内）事例③	演　習	
３０	筆記テスト		

[使用テキスト・参考文献]
介護福祉士養成講座１５
医療的ケア

[評価方法]
筆記テスト　８０％
授業態度　１０％
出席状況　１０％

＜備考＞
喀痰吸引実技　①口腔内　5回以上　②鼻腔内　5回以上　③気管カニューレ内部5回以上
Ⅰ・Ⅱ講義で実時間、人間と社会1.5時間、保健医療制度とチーム医療2時間、安全な療養生活4時間清潔保持と感染予防2.5時間、健康状態の把握3時間、高齢者及び障害児・者の喀痰吸引概論11時間、高齢者及び障害児・者の喀痰吸引実施手順解説8時間、高齢者及び障害児・者の経管栄養概論10時間、高齢者及び障害児・者の経管栄養実施手順解説8時間

授　業　概　要

科目名	授業方法	授業担当者	実務経験
医療的ケアⅡ	講　義・演　習	森田　婦美子・山下　美登世 中川　香居	一部有

授業の回数	時間数(単位数)	配当学年・時期	必修・選択
30回	60時間（2）	2学年・後期	必　　修

[授業の目的]

喀痰吸引、経管栄養について根拠に基づく手技が実施できるように基礎的知識・実施手順方法を学ぶ。安全な喀痰吸引等の実施のため、確実な手技を学習する。

[授業の概要]

医療的ケアの実施をするうえで基礎となる考え方や関連する法律、チームの一員として介護福祉士が担う役割について学んだうえで、経管栄養・胃瘻の知識・手順・留意点、及び関連するケアについて安全かつ確実な実施を行うために演習を行う

経管栄養の演習は、シミュレーターで口腔内・鼻腔内・気管カニューレ内部を各5回以上演習する

[到達目標]

経管栄養・胃瘻は医療行為であることを踏まえ基礎的な知識・技術を習得し安全に根拠を持って実施できるようになる。演習を通し経管栄養・胃瘻の一連の手順を正確に、安全・適切に実施することができる。

1．医療ケアが必要な利用者・家族の気持ちが理解でき、介護者として望ましい姿勢が実行できる
2．医療的ケアにおける身体の解剖生理が理解でき、説明できる
3．医療的ケアにおける多職種との連携を理解し、その必要性が説明できる
4．感染予防について説明でき、実施できる
5．経管栄養・胃瘻を安全に実施できるように、必要物品の片付け、点検を行う事ができる
6．演習を通して、喀痰吸引の一連の手順を正確に、安全・適切に実施することができる

[授業計画]

回	授業内容	方　法	備考
1	医療的ケアⅠの振り返り 医行為について・事故発生時の対応	講　義	
2	高齢者および障害児・者の経管栄養概論 ① 消化器系のしくみと役割	講　義	
3	高齢者および障害児・者の経管栄養概論 ②消化器症状とは	講　義	
4	高齢者および障害児・者の経管栄養概論 ③経管栄養が必要な状態	講　義	
5	高齢者および障害児・者の経管栄養概論 ④経管栄養のしくみと種類・用いる器具	講　義	
6	高齢者および障害児・者の経管栄養概論 ⑤安全・安楽な実施とは・安全確認の方法	講　義	
7	高齢者および障害児・者の経管栄養概論 ⑥子どもの経管栄養	講　義	
8	高齢者および障害児・者の経管栄養概論 ⑦ ヒヤリハット・アクシデント	講　義	
9	高齢者および障害児・者の経管栄養概論 ⑧経管栄養の技術	講　義	
10	高齢者および障害児・者の経管栄養概論	講　義	

	⑨経管栄養に必要なケア		
11	高齢者および障害児・者の経管栄養概論 ⑩報告と記録について	講　義	
12	高齢者および障害児・者の経管栄養概論 ⑪ 経管栄養の留意点	講　義	
13	高齢者および障害児・者の経管栄養概論 ⑫ 安全確認の方法	講　義	
14	救急蘇生法　　①応急手当の重要性	講　義	
15	救急蘇生法　　②応急手当の種類	講　義	
16	救急蘇生法　　①BLSについて	講　義	
17	救急蘇生法　　②BLSについて	講　義	
18	経管栄養のケアの実施① シミュレーターを用いた演習（胃瘻）事例① 演習手順の確認チェック	演　習	
19	経管栄養のケアの実施⑦ シミュレーターを用いた演習（胃瘻）事例① 必要物品・手順の確認	演　習	
20	経管栄養のケアの実施⑧ シミュレーターを用いた演習（胃瘻）事例①	演　習	
21	経管栄養のケアの実施⑨ シミュレーターを用いた演習（経鼻経管）事例②	演　習	
22	経管栄養のケアの実施⑩ シミュレーターを用いた演習（経鼻経管）事例②	演　習	
23	経管栄養のケアの実施⑪ シミュレーターを用いた演習（胃瘻）事例① 演習手順の確認チェック	演　習	
24	経管栄養のケアの実施⑫ シミュレーターを用いた演習（経鼻経管）事例② 演習手順の確認チェック	演　習	
25	救急蘇生法①　応急手当の実際	演　習	
26	救急蘇生法②　BLSの実践	演　習	
27	医療的ケア技術試験	演　習	
28			
29			
30			
31	筆記テスト		

[使用テキスト・参考文献]
介護福祉士養成講座１５
医療的ケア

[評価方法]
技術テスト　８０％
授業態度　　１０％
出席状況　　１０％

＜備考＞　経管栄養実技　①胃瘻又は腸瘻　5回以上　②経鼻経管栄養　5回以上
救急蘇生法1回以上
Ⅰ・Ⅱ講義での実時間、人間と社会1.5時間、保健医療制度とチーム医療2時間、安全な療養生活4時間、清潔保持と感染予防2.5時間、健康状態の把握3時間、高齢者及び障害児・者の喀痰吸引概論11時間、高齢者及び障害児・者の喀痰吸引実施手順解説8時間、高齢者及び障害児・者の経管栄養概論10時間、高齢者及び障害児・者の経管栄養実施手順解説8時間